

中国語の比較構文 —意味と論理構造—

于 飛

0. はじめに

自然世界や人類社会において、存在している客観的事物および人間の頭で思い浮かべた抽象的な概念はその数量、状態や性質などは必ず異なるものである。人々はこの違いを認識し、区別するために、それらの事物を比較する必要がある。従って、「比較」は人間にとって極めて重要かつ基本的な方法であるだけでなく、客観世界を認識する過程においても共有すべき考え方であると言える。この「比較」という考え方が言語領域に反映すると、言語研究における「比較範疇」といわれるものになり、そして、それは文法研究におけるいわゆる「比較構文」である。

世界中のいずれの言語においても、必ず「比較」という概念が存在している。言語学者 L. Stassen (1985) は「比較構造は述語の量級において二つの事物の分級位置を確定する機能を賦与する構造である」と述べている。さらに、「比較 (comparison)」は言語において、最も重用な意味範疇のひとつであり、事物の特殊性を浮かびあがらせる表現式であることをも指摘した。この「比較」という意味範疇を具体的な統語構造で表わしたものが「比較構文」である。

比較構造は言語において、普遍的に存在する文型構造として、その構造自体は特定の文型意味と論理構造を持っている。二十世紀八十年代から今日に至るまで比較構文についての研究は盛んに行われている。特に、二十世紀末期に比較構文の研究は頂点に達し、多くの論文が現れた。その中に

は、比較構文の形式構成について論じる論文や、比較結果の入れ替え規則についての論文、更には比較文の語用条件についての論文などがある。また、否定比較構文に関する専門的な研究も行われている。本研究は先人の研究を踏まえ、論理的な分析方法を用いて、中国語の比較構文の文型意味と論理構造を明らかにしたい。さらに、有限オートマトンとタイプ理論に基づき、比較構文の「入力記憶」の流れおよび人間の思惟モデルを明らかにしたい。

1. 「比較」とは何か

まず、「比較」とは何かについて考えることにする。『現代漢語辞海』によると、「事物の異同関係を確定するための過程と方法である。まず、ある基準により、互いにかかわる事物を対照し、その共通点と相違点を確定し、その事物について分類をする。各々の事物の内部の特性におけるそれぞれの面から比較し、また、物の内在的な連関を把握し、物の本質を認識することである。(3543 頁参照)」という。

『現代漢語大辞典』は「一定の基準により二種あるいは二種以上の関連ある事物との間で、その優劣・異同を見分けることである。(57 頁)」と定義した。

『広辞苑(第六版)』は「くらべること。くらべ合わせること。(2337 頁)」と述べている。

『国語大辞典言泉』は「二つ以上のものを互いにくらべ合わせて、それらの異同、優劣、共通点などを検討すること(1925 頁)」としている。

呂叔湘(1982)は以下のように説明した。「異同」、「優劣」はどちらも比較から生じる。二つの出来事には、それがもし完全に異なるのであれば、両者はかかわりがないといってよい。たとえば、

- (1) 今天热。(今日は暑い)
- (2) 你姓张。(君は張という)

例(1)と例(2)の文は関係性を有さない。また次の(3)、(4)の文における関係にも関わりがない。

- (3) 今天热，不去了。(今日は暑いから、行かない)―(因果関係)
 (4) 你姓张，又是济南人(君は張という名前で、また済南出身です)―(添加関係)

(3)のような因果関係と(4)のような添加関係は比較関係を構成しない。比較関係を構成するためには、共通する部分と相違する部分があり、相違点を見つけられる場合である。たとえば、

- (5) 昨天热，今天更热。(昨日は暑かった、今日はもっと暑くなる)

あるいは相違の中から共通点を見つけられる場合である。たとえば、

- (6) 你姓张，我也姓张。(君は張君で、私も張です)

これらは比較関係を構成できる。(呂叔湘 1982 : 352 頁参照)

2. 「比較構文」とは何か

「比較構文」について、馬建忠(1898 : 190)は「同じ形容詞について、その似ている程度が一緒なのではなく、ちがいのあることが比較である」と定義している。呂叔湘(1982)は「比較構文は、事物の異同あるいは優劣の比較関係を表す文である(190 頁)」と定義している。太田辰夫(1987: pp.171—181 参照)は「比較には、絶対と相対の区別がある。「絶対比較」は比較する対象が文の中に現われない、「相対比較」は比較する対象が文の中に現れる。」と指摘している。このような解釈は意味上から「比較構文」を説明する。车竞(2005)は統語構造から、「現代中国語の比較構文は、述語の中に比較語彙あるいは比較形式を含んでいる文である。」と定義している。

本稿は车竞(2005)の見解に加えて、さらに「比較構文」は構造上からみると、「比較主体(Subject)」、「比較客体(Standard)」、「比較詞(Mark)」、「比較点(Points of Comparison)」、「比較値(Result)」などで構成される(唐厚広1997)という考えをとり入れる。比較というのは、二種あるいは二種以上の同じあるいは異なる事物、現象などについて比べて、その事物の特徴を説明する方法である。次の用例を見てみよう。

(7) 张三 比 李四 个子 高。(張三は李四より背が高い。)

X 比較詞 Y D W

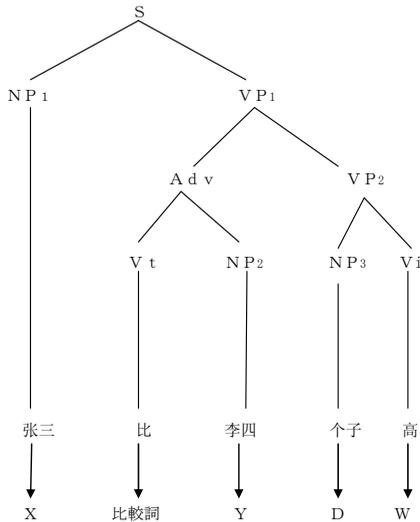
(8) 妹妹 像 姐姐 一样 漂亮。(妹は姉のように綺麗だ。)

X 比較詞 Y 程度副詞 W

例(7)の“比”は比較を表す語彙であり、例(8)の“像……一样”は比較形式である。しかし、単に“像”を“比較詞”と見なすこともできる。比較される対象(例(7)の“张三”と例(8)の“妹妹”)は“比較主体”と呼ぶ。この“比較主体”は“X”と記す。比較の参照対象(例(7)の“李四”と例(8)の“姐姐”)は“比較客体”と呼び、“Y”と記す。比較主体と比較客体の間に用いられ、比較する関係を表すあるいは比較の客体を導く語彙(“比”と“像”)を“比較詞”と呼ぶ。比較の結果を表す部分(“高”と“漂亮”)は“比較値”と呼び、これを“W”と記す。具体的な比較を表す部分(例(7)の“个子”)を“比較点”と呼び、“D”と記す(車 2005)。例(8)の“一样”は“比較値”の“漂亮”を修飾する程度副詞と考える。従って、中国語の比較文の構造は「X+比較詞+Y+(D)+(程度副詞)+W」と記述することができる(Dと程度副詞の位置は不確定で、省略される場合もある)。この構造のレベルの違いを判然とするために、ここで例(7)と(8)の構造を樹形図で表示する。

例(7)は樹形図で表示すると、下の図1になる。

図 1



図表 1 からみると、用例 (7) の統語規則¹は次の通りである。

- a. $S \rightarrow NP \quad VP$
- b. $VP \rightarrow Adv \quad VP$
- c. $Adv \rightarrow Vt \quad NP$
- d. $VP \rightarrow NP \quad Vi$

用例 (7) の語彙規則²は次の通りである。

1 「統語規則」と2「語彙規則」については『逻辑语文学』（方立 2005）第二章による。

『逻辑语文学』により、論理言語 L_t は自然言語と同様に統語部分を持つ。統語部分は語彙と統語規則を含んでいる。

語彙部分は次のようになる。

- a. 个体定項 a, b, c, d, \dots
- b. 个体変項 x, y, z, \dots
- c. 一項述語 L, M, \dots
- d. 二項述語 N, O, \dots

統語規則は次のようになる。

- a. もし δ が一項述語、 α が个体定項であれば、 $\delta(\alpha)$ は適格な式である。
- b. もし γ が二項述語、 α と β が个体定項であれば、 $\gamma(\alpha, \beta)$ は適格な式である。(27 頁参照)

NP → {张三, 李四, 个子}

Vt → {比}

Vi → {高}

ここで、語彙規則と統語規則の記号について説明する。

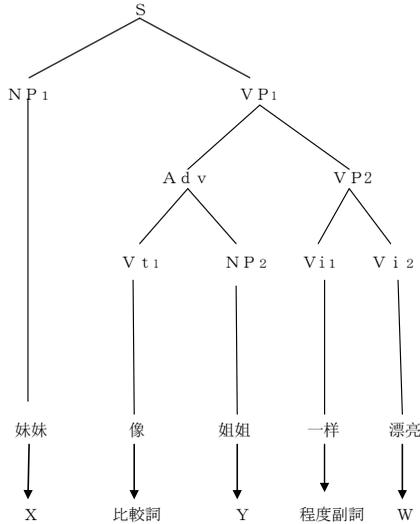
Sは「文」である。NPは「名詞連語」、あるいは「名詞フレーズ」という。

NP₁、NP₂とNP₃の中の1、2、3は特に意味はなく、名詞連語を区別するためである。

Vtは他動詞である。またViは自動詞である。(ここの“比”は前置詞であり、“高”は形容詞であるが、ともに動詞と見なすことができる)。

例(8)は樹形図で表示すると、下の図2になる。

図2



用例(2)の統語規則は次の通りになる。

a. S → NP VP

b. VP → Adv VP

c. Adv → V t NP

d. VP → V i V i

用例(1)の語彙規則は次の通りになる。

NP → {妹妹, 姐姐}

V t → {像}

V i → {一样, 漂亮}

この“一样”と“漂亮”は本来は形容詞であるが、動詞と見なすことができる。

3. 中国語における比較構文についての先行研究

3.1 比較構文に関する共時的な研究

3.1.1 「比較の範疇と類型」についての研究

3.1.1.1 馬建忠(2007)による研究

馬建忠は中国語文法の創始者であり、彼の著『馬氏文通』は中国語についての最初の体系的な文法著作である。『馬氏文通』は中国語の比較構文を「平等比較構文(平比文)」、「差異比較構文(差比文)」、「最上級比較構文(极比文)」に分けている。

平等比較構文(平比文)について、『馬氏文通』は「平等比較構文とは、形容詞を用いて、比較する二つの対象に高低、優劣に違いがない比較構文である。(馬 2007: 135)」と定義する。普通は「如」、「若」、「犹」などの語彙を用いて、比較対象を接続する。

(9) 君子之交淡若水, 小人之交甘若醴。(君子の交わりは淡きこと水の如く、小人の交わりは甘きこと醴の如し。)(『庄子·山木』)

(10) 肌肤若冰雪, 淖约若处子。(肌膚は冰雪の若く、淖约たること処子の若し。)(『庄子·逍遥游』)

3.1.1.2 趙元任 (1968) による研究

趙元任氏は『中国話的文法』において、形容詞の比較範疇を「平等比較（相等）」、「高比較（高于）」、「低比較（低于）」、「最上級（最高）」、「反最上級（反最高）」の五つの種類に分けている。

たとえば、反最上級（反最高）の文型は「最（～頂）不A」である。この文型は直接構成成分により、二種の分け方がある。次の例を通して、説明しよう。

(11) 最不聪明的方法。（最も聡明でないやり方）

例(11)の構成について二つの理解ができる。一つは「最不+聪明的方法」の構造であり、もう一つは「最+不聪明的方法」の構造である。しかし、この二つの分け方は真理値条件において表す意味がほぼ同じである。「不」はうしろの形容詞と複合するかどうかにかかわらず、その構造は「最（～頂）+不」の文型であると考えてもよい。

3.1.1.3 呂叔湘 (1982) による研究

呂叔湘は『中国文法要略』において、文の表現を“範疇”と“関係”に分け、“二つの事物の間に色々な関係がある”という考えによって、文の関係を六つに分けた。その中の“異同—優劣”の関係が比較関係である。氏はさらに、“類似(类同)、比喩(比拟)、近似(近似)、優劣(高下)、低比較(不及)、高比較(胜过)、最上級(尤最)、損得(得失)、非及(不如)、比例(倚变)”の十種を下位分類とした。この呂の研究は比較範疇についての最も全面的な研究である。それは比較および比較にかかわる概念と統語構造を含んでいる。

呂は動作(動詞)についての比較を「損得(得失)」、「非及(不如)」と「比例(倚变)」の三種類に分けている。厳密にいうと、動作の優劣を比較することはできない。ここで述べる動作の比較はただ動作における程度の強さの比較である。従って、一般的には「甚」を用いて程度を表す。たとえば、(12) (后会五铢钱白金起)民为奸，京师尤甚。(民衆は利己的であり、この中では首都の方が最も深刻である。) (『史记・酷吏传』)

- (13) 老臣有四男一女，愛女甚于男。(臣は四人の息子と一人の娘がいるが、娘の気に入り様は息子より甚だしい。) (『汉书・張禹傳』)

「損得(得失)」の比較は認識の問題だけではなく、実際は行動にかかわる。その文型は優劣の比較と異なる。具体的には「宁」と「不如」の二種類に分ける。この二種はどちらも「与其」と共起することができる。

- (14) 此龟者，宁其死为留骨而贵乎？宁其生而曳尾于涂中乎？(この亀は、寧ろ其れ死して骨を留めて貴ばれんか、寧ろそれ生きて尾を塗中に曳かんか) (『庄子・秋水』)

「及ばない(不如)」の比較は「損得(得失)」の比較の一種である。疑問文は「孰」を用いて選択を表す。

- (15) 大而思之，孰与物畜而裁之？从天而颂之，孰与制天命而用之？(天を大として之を思うは、物畜えて之を裁するに孰与ぞ。天に従いて之を頌するは、天命を制して之を用うるに孰与ぞ。) (『荀子・天論』)

「比例(倚变)」の比較は、互いに関係している。すなわち、一緒に前進あるいは後退する時に生じる両者の変化の比較である。これは「関数の関係」を持つといってもよい。あるいは「比例」の比較と言ってもよい。中国語の古文は「愈」を用いて比較関係を表す。一方、現代中国語は「愈」あるいは「越」を用いてこの比較関係を表す。

- (16) 越大越没规矩。(年上になればなるほど不始末になった。) (『红楼梦』)

3.1.1.4 黎锦熙 (1992) による研究

黎锦熙氏は『新著国语法』において、文法の分析から語彙の分析まで、しばしば「比較」について言及した。第十章の「副詞細目」の100番「数量副詞」の項目において、「数量副詞」を「度数に関するもの」、「程度に関するもの」と「範囲に関するもの」の三種類に分けている。その中の「程度に関する数量副詞」を更に四つの項目に分けている。その中の第2項は「比較」を表し、「平等比較(平比)」(“一样”、“一般”、“似的/似地”)(例(17)参照)と「差異比較(差比)」(述語の前につける“更”/“更加”/“更见”、“尤其”/“尤”、“加倍”/“倍”、“比较地”、“较为”/“较”、“越发”

／“越”／“愈”／“益发”／“一发”がある。また述語のうしろに“些”、“一点儿”、“几倍”／“几等”、“多”。) (例(18)を参照)をつけている。第3項は極点を表し、「最上級比較(極比)」(“最”、“极”／“极其”／“至”、“顶”、“挺”、“第一”、“尽”) (例(19)参照)と「広くさすもの(泛说)」(“绝对地”、“非常”、“格外”、“怪”、“特别”／“特”、“十分”、“满”／“漫”、“狠”／“甚”、“了不得”、“厉害”／“利害”) (例(20)参照)を含んでいる。さらに、「平等比較(平比)」、「差異比較(差比)」と「最上級比較(極比)」は形容詞の三種の比較方法であるとしている。英語においては形容詞の語尾変化で表示し、中国語はすべて副詞で表示する。」と指摘した。

(17) 那边来的人马, 犹如海潮“一般”。(あちらから来た軍隊は潮のようだ。)

我心里的干净好像清水“似的”。(私の心の美しさは清水のようだ。)

我的心和清水“一样的”干净。(私の心は清水のように綺麗だ。)

(18) 阴谋家的祸国“更”厉害。(陰謀者の災いはもっとひどい。)

这枝笔“比较地”好写。(このペンは比較的書きやすい。)

捣乱派少“些”。(騒乱派はやや少ない。)

当时米价贵了“五倍”。(当時の米の価格はいつもより五倍高くなった。)

(19) 她在这一班里, 年纪“最”轻, 功课“最”好。(彼女はこのクラスにおいて、年が一番若くて、成績が一番いい。)

中山公园的树木, 柏树“顶”多。(中山公園の木において、柏木が一番多い。)

今年夏天“第一”炎热。(今年の夏は一番暑い。)

(20) 这个办法“绝对地”不行。(この方法は絶対駄目だ。)

我“满”不怕你。(私は君を全然怖がらない。)

今年夏天“很”热。(今年の夏はとても暑い。)

第十一章の「前置詞細目」の「方法を表す前置詞」の第5種「比較の前置詞(介所比)」の中の前置詞は「平等比較構文(平比文)」(類似の関係を表す、“和”／“合”、“同”／“如同”／“犹如”／“像”、“与”／“跟”を用いる)と「差異比較構文(差比文)」(程度の優劣を表す、“比”／“较”／“较比”、“过”／“过于”／“于”を用いる)を作る。

省略表現を分析する第五章において、「主語を省略する平等比較構文」、「述語を省略する平等比較構文—形容詞の平等比較方法」と「否定の平等比較構文—形容詞の消極的な差異比較方法」の三節で、属性が現れない比較構文の省略できる位置(句位)と成分を詳しく論じた。

第十六章では、『馬氏文通』の考えを踏襲し、さらに複合文まで考察し、比較構文を「平等比較構文(平比文)」、「差異比較構文(差比文)」、「選択複合文(審決句)」の三種に分けた。「審決」というのは「選択」である。差異比較をする二つのものを取りだし、さらに主観的考えによって審査し、判断している。“与其…宁可/还是”・“与其…不如/何如”のような構文を用いる。たとえば、

- (21) “与其”太奢侈了,“宁可”过于俭朴。(非常に奢侈にするよりも、質素なほうがいい。)
- (22) “与其”写死文,“不如”说活话。(つまらぬ文章を書くよりは、いきいきとしたことばを言うほうがいい。)

しかし、現在の学者は黎錦熙氏の分析方法は非常に煩瑣であり、ある見解は現在の日常的な用法と一致しなくなっていると考えている。

3.1.1.5 高名凱 (1957) による研究

高名凱は『漢語語法論』の第十章の“量詞(quantitative)において、“比詞”という概念を提出し、「比較の量を表す文法範疇を“比詞”という」と説明した。さらに、比較の程度により、「差異級(差級)」(comparative)と「最上級(極級)」(superlative)の二種に分け、初めて「比較」と「範疇」の概念を結びつけた。なお、古典中国語と口頭語を区別して論じた。「差異級(差級)」を論述する際には比較結果は比較主体と客体の相対関係を表すことを指摘した。

- (23) 小马先生比他父亲强多了。(馬さんは彼のお父さんより能力が強い。)(『二馬』)

「最上級(極級)」について、相対的最上級(relative superlative)と絶対的最上級(absolute superlative)に分けている。前者は比較により得

る最上級である。たとえば、“最”、“最为”を用いる。

(24) 伊太太最爱喝中国茶。(伊さんの奥さんは中国のお茶が一番好きだ。)(『二馬』)

後者は量級の絶対的極点を表す。比較により得るものではない。たとえば、古代中国語は“至”、“极”、“绝”、“殊”を用い、口頭語は“太”、“挺”、“非常”、“特别”、“极顶”などを用いる。

(25) 遇见女子，他的话是特别的多。(女性に会って、彼はけっこうしゃべれる。)(『二馬』)

3.1.1.6 刘月华・潘文娛・故韡(1983)による研究

刘月华・潘文娛・故韡氏は『实用现代汉语语法』において、中国語の比較構文を二種に分けている。一つは「事物、性状の異同の比較」である。

「A跟B一样」と「A有B那么(这么)…」の二つの文型をとりあげた。

(26) 这间屋子和那间屋子一样大。(この部屋はあの部屋と同じ大きさだ。)

(27) 他弟弟快有我这么高了。(彼の弟はすぐ私と同じ身長になる。)

二つめは「性質、程度の差と優劣の比較」である。ここで、「A(主語) + 比B(状態語) + 述語」と「主語 + A比B(状態語) + 述語」の二つの文型をとりあげた。

(28) 这座山比那座山高一些。(この山はあの山より少し高い。)

(29) 他现在比以前进步多了。(彼は現在が以前よりうんと進歩した。)

3.1.1.7 太田辰夫(1987)による研究

太田辰夫氏は『中国語歴史文法』において、中国語の比較構文を「平等比較(平比)」、「差異比較(差比)」、「最上級比較(極比)」の三種類に分けている。また、「比較には絶対的のものと相対的のものがある。絶対的なものは比較される対象が句にあらわれていないものであって、相対的なものはこれがあらわれているものである。ただし平比には絶対的なものがなく、差比も絶対的なものは明確さを缺くきらいがあり、決定に困難なことがある。要するに絶対的な比較で明確なものは極比のみである。(太田 1987:171

—172)」ことを指摘した。さらに、各種比較の標識をとりあげた(次の図3参照)。

図3

	絶対的	相対的
平比		“A 象 B 一样…”
差比	“A 更…”	“A 比 B…”
極比	“A 最…”	(限定式) “A 在…中最…” (非限定式) “A 比什么都…”

3.1.1.8 车竞(2005)による研究

车竞氏は比較構文を「平等比較構文(平比文)」、「差異比較構文(差比文)」、「限定比較構文(限比文)」の三種に分けている。

限定比較構文(限比文)というのは比較客体を最大限度あるいは最低限度として、「比較主体が大きい \geq 」あるいは「比較客体が小さい \leq 」の比較構文である。たとえば：

(30) 我下功夫不比他小。(私の努力は彼より少なくない。)

(31) 张三有李四个子高。(張三の背は李四のような高さである。)

3.1.1.9 冯春田(2000)による研究

冯春田氏は『馬氏文通』の研究に基づいて、さらに“疑問比較構文(疑比句)”の概念を提出した。

疑問比較構文(疑比句)というのは疑問代名詞を用いる比較構文である。その疑問についての答えは平等比較、差異比較あるいはその他である。たとえば：

(32) 你如今领兵来的,却又是怎么样个人? 比昨日那中军也还好些么?(あなたが今軍を率いて来ましたが、どのような人ですか。昨日のあの中軍よりも少しはましですか。)(『醒世姻缘传』)

3.1.1.10 丁声树 (1961) による研究

丁声树氏は『現代漢語語法講話』において、“比”構文が表示するのは「程度の差」であり、異同あるいは類似ではないことを明示した。なお、“比”の用法を二種に分けている。一つめは「同類の事物の比較」である。

(33) 三元比谁都明白, 可爱。(三元はだれより頭がよく、可愛い。)(老舍)

(34) 色味都比桑甚要好得远。(色と味はどちらもクワの実よりはるかにいい。)(鲁迅)

二つめは「程度の差が時間とともに変化すること」である。

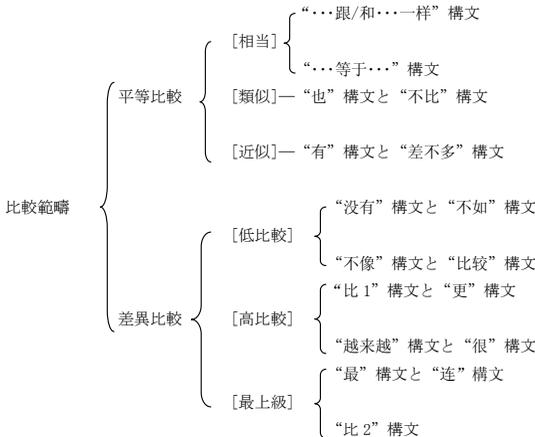
(35) 从此金旺旺旺比以前更厉(利)害了。(これから金旺の事業が以前よりもっと盛んに成っている。)(赵树理)

(36) 过了冬至, 白天一天比一天长了。(冬至を経て、昼間はだんだん長くなっている。)

3.1.1.11 刘焱 (2004) による研究

刘焱氏は特定の文脈の影響を除いて、比較範疇は意味統合範疇であることを明示した。さらに、比較範疇を「平等比較(相当、類似、近似を含む)」と「差異比較(低め比較、高め比較、最上級を含む)」の二種に分けている。比較範疇と対応する文型は図表で表示すると、次の図4になる。

図4 (刘焱 2004 : 48)



3.1.1.12 赵金铭 (2001) による研究

赵金铭は『論漢語的比較範疇』において、認知言語学の理論と方法を用いて、比較は一つの「範疇」であることを明示した。さらに、認知言語学の類似性原理を運用し、比較の範疇を「類似（近似）」、「相当（等同）」、「高比較（胜于）」と「低比較（不及）」の四種に分けている。その中の「相当（等同）」は静態の比較範疇であり、他の三種類は動態の比較範疇であることを指摘した。また、この四種の比較範疇についてのそれぞれの文型をとりあげた(次の図5参照)。

図 5

	類似（近似）	相当（等同）	高比較（胜于）	低比較（不及）
典型文型	“…像…” “…好像…” “…像…这么…” “…像…似的…” “…似的…”	“…跟…一样…” “…跟…那么…” “…跟…一般…” “…跟…相同”	“…比…” “…比…还/更…” “…比…一点儿/一些”	“…不如…”
常用文型	“…跟…相近似” “…跟…差不多” “…跟…不相上下”	“…有…那么…” “…等于…” “…相当于…”	“…比…形+动+数量补语” “…比…动+得+程度补语” “…比…助动+动”	“…没有…那么…” “…不及…”
準常用文型	“…好似…” “…如同…”	“…不比…” “…比得上…” “…赶得上…”	“…比…还(名)”	“…比不上…” “…赶不上…”
古典文型	“…近似于…” “…犹如…”	“…无异于…” “…不下于…” “…不亚于…”	“…高/重/大/强于…” “…高/胜/长/强于…”	“…次于…”

3.1.1.13 许国萍 (2007) による研究

许国萍はタイプ範疇理論に基づいて、中国語の比較範疇を作り上げた。比較範疇の中心を「平等比較（相当、類似を含む）」と「差異比較（最上級、優性比較、劣性比較を含む）」の二種に分けている。许国萍は同時に八種の

比較モデルの構造および属性を並べて論じた。

- a. 少なくとも二つ関連するものがある。一つは比較主体(subject)であり、もう一つは比較基準(standard)である。
- b. 関連するものは同一の範疇に属する。なお、一般には基本範疇の事物である。
- c. 関連するものは明確な呼称がある。
- d. 関連するものの指示は異なる。
- e. 関連するものは共通の属性を持つ。さらに、この属性は明示的に現れる。
- f. 関連するもの間の比較関係は明確であり、隠れた比較関係あるいは推論的な比較関係ではない。
- g. 比較の関係がはっきりしている。
- h. 比較の結果は比較基準と比較して出てくる。独立して出るのではない。

さらに、彼女はタイプ理論を用い、中国語の比較構造について研究した。许国萍は比較の形式が明確な標識語(“如/比/跟”など)を用いる以外、明確でない語彙(“越…越…/越来越…”、“连…都/也”、“比較”)を用いる文型もあることを指摘した。

(37) 她越想着过去就越恨那些兵们。(彼女は昔のことを思い出せば思い出すほどあの兵士たちが恨めしくなる。)

(38) 这个道理连小孩都懂。(この道理は子供さえ分かっている。)

(39) 你这苦闷比较单纯的贫困或是失恋更有深切的意义。(君の心の苦悶は単純な貧しさあるいは失恋と比較すると、より深い意義がある。)(茅盾『青年苦悶的分析』)

3.1.2 「比較構文の構成要素」についての研究

3.1.2.1 比較主体(X)と比較客体(Y)との関係についての研究

3.1.2.1.1 朱德熙(1982)による研究

朱德熙氏は『语法讲义』において、「N1(的)+N2+比+N3+VP0」と「N1(的)+N2+比+N3的+(N2)+VP0」の二種の形式のちがいを

論じた。まず、前者はN1とN3をN2において比較させ、後者はN1のN2とN3のN2を比較している。しかし、もし前者のN2とN3が比較されうるのであれば、文には曖昧性が生じる。朱徳熙はその理由は、中国語が話題を優先する言語であることによると考えた。これを説明するため、次のような用例をとりあげている。

- (40) 我的年纪比他大。(私は彼より年上だ)
 (41) 我的书比他多。(私の本は彼より多い)
 (42) 我的孩子比他的大。(私の子供は彼のより年上だ)

3.1.2.1.2 李臨定(1986)による研究

李臨定氏は形容詞を述語とする比較構文を以下のように分類した。

- a. 「名詞1+比+名詞2+形容詞」
 (43) 他写的字比你好。(彼の書道は君より上手である。)
- b. 「主述構造/動詞+比+動詞+形容詞」
 (44) 砸你的茶馆比砸个砂锅还容易。(君の喫茶店を壊すことは土鍋を壊すことよりもっと簡単だ。)
- c. 「主述構造+比+名詞+形容詞」
 (45) 他办事比我认真。(彼の仕事ぶりは私より真面目です。)
- d. 「名詞1+比+名詞2+名詞3+形容詞」
 (46) 你比我书多。(君の本は私より多い。)
- e. 「名詞1+比+名詞2+形容詞+数量詞」
 (47) 钱比人更厉害一些。(お金は人間よりすごい。)
- f. 「名詞+数量詞+比+数量詞+形容詞」
 (48) 我们讨论了四次，一次比一次深入。(私たちは四回討論した、だんだん深く掘り下げている。)

これに基づいて、比較構文の完全式と省略式を述べた。完全式は“比”の前項と後項の成分がほぼ同じである。省略式は完全式のある部分を省略して形成したものである。

3.1.2.1.3 马真(1986)による研究

马真氏は文の意味関係から着手し、現代中国語の“比”構文の「N1 的 N + 比 + N2 的 N + VP (N は名詞性成分であり、VP は述語成分である。)」の構造の比較項目 X (N1 的 N) と Y (N2 的 N) の四つの省略方法を論じた。

a. 「N2 的 N」が「N2 的」のみを入れ替える。

(49) 他的马比你的马跑得快。(彼の馬は君の馬より走るのが速い)

→ 他的马比你的跑得快。

→ * 他的马比你跑得快³。

b. 「N2 的 N」が「N2」のみを入れ替える。

(50) 他的脾气比你的脾气好。(彼の気質は君の気質よりいい)

→ * 他的脾气比你的好。(* 文が成立しない)

→ 他的脾气比你好。

c. 「N2 的 N」が「N2 的」と「N2」の両方を入れ替える。

(51) 他的马比你的马多。(彼の馬は君の馬より数が多い)

→ 他的马比你的多。

→ 他的马比你多。

d. 「N2 的 N」が「N2 的」と「N2」のどちらも入れ替えられない。

(52) 他的父亲比你的父亲健谈。(彼のお父さんは君のお父さんより話上手である)

→ * 他的父亲比你的健谈。

→ * 他的父亲比你健谈。

さらに、この「N1/N2 的 N」の入れ替えの五つの要素を以下のようにまとめた。まず第一に「N1、N2 と N の意味関係」であり、次に「N1、N2 および N の性質」であり、三つ目としては「VP の状況」であり、四つ目は「社会心理」であり、そして五つ目は「文のアクセント」である。

³ 「*」を付けているのはこの言い方はできるが、意味が変わるあるいは文が成立しない。

3.1.2.1.4 邵敬敏(1990)による研究

邵敬敏氏は马真の研究に基づいて、比較の意味と文法を結びつけ、比較客体の入れ替えについてさらに深く考察した。「N1/N2 的N」の中のN1/N2とNの関係は意味関係だけではなく、同時に統語関係であることを指摘した。すなわち、“説明する”と“説明される”関係である。この場合には比較主体の“N1 的N”と比較客体の“N2 的N”の中の“N”が省略できる。具体的な省略の状況は次の用例の通りになる。

- (53) 河蟹的味道比海蟹的味道鲜。(シナモクズガニの味はカニの味より美味しい。)



→河蟹的味道比海蟹鲜。

→河蟹比海蟹鲜。

- (54) 他的年纪比我的年纪大。(彼は私より年上だ。)



→他的年纪比我大。

→他比我大。

- (55) 书的数量比杂志的数量多。(本のは数は雑誌の数より多い。)



→书的数量比杂志多。

→书比杂志多。

3.1.2.1.5 陆俭明(1999)による研究

陆俭明氏は比較構文の「N1 的N + 比 + N2 的N + VP」(VPは述語性の成分であり、形容詞性の成分、動詞性の成分、主述連語などを含む。)構造のN1/N2とNとの意味関係を八種に分けている。

- a. 所属関係である。この場合には“N2 的N”が“N2 的”と入れ替え

られ、“N 2”と入れ替えられない。

(56) 张华的猫比李军的猫跑得快。(張華の猫は李軍の猫より走りが速い。)

→张华的猫比李军的跑得快。

→*张华的猫比李军跑得快。

b. 親族関係である。この場合には“N 2 的N”を“N 2 的”にすることができない。

(57) 他的朋友比你的朋友不讲信用。(彼の友達は君の友達より信用できない。)

→*他的朋友比你的不讲信用。

もし“N”が“N 2”の目上の人である場合には、“N 2 的N”を“N 2 的”に入れ替えられない。

(58) 我的爸爸比你的爸爸矮。(私の父は君のお父さんより背が低い。)

→*我的爸爸比你的矮。

もし“N”が“N 2”の目下の人である場合には、“N 2 的N”が“N 2 的”と入れ替えられる。

(59) 我的孩子比你的孩子笨。(私の子供は君の子供より頭がわるい。)

→我的孩子比你的笨。

c. 隷属関係である。この場合“N 2 的N”は“N 2 的”と“N 2”の両方に入れ替えられる。

(60) 他的眼睛比你的眼睛大。(彼の目は君の目より大きい。)

→他的眼睛比你的大。

→他的眼睛比你大。

d. 属性関係である。この場合には“N 2 的N”は“N 2”に入れ替えられる。しかし、“N 2 的”に入れ替えられない。

(61) 飞机的速度比汽车的速度快。(飛行機のスピードは車のスピードより速い。)

→飞机的速度比汽车快。

→*飞机的速度比汽车的快。(現在では成立する)

e. 原材料関係である。この場合“N 2 的N”は“N 2 的”に入れ替えら

れ、“N2”に入れ替えられない。

(62) 木头的桌子比铁的桌子轻。(木のテーブルは鉄のテーブルより軽い。)

→木头的桌子比铁的轻。

→*木头的桌子比铁轻。

f. 時空関係（時間あるいは場所関係）である。この場合は“N2的N”は“N2的”と“N2”の両方に入れ替えが可能である。

(63) 今天的报纸比昨天的报纸有意思。(今日の新聞は昨日の新聞より面白い。)

→今天的报纸比昨天的有意思。

→今天的报纸比昨天有意思。

g. 類族関係である。この場合には“N2的N”は“N2的”に入れ替えることができるが、“N2”に入れ替えることができない。

h. 準所属関係である。この場合は“N2的N”は“N2”に入れ替えられ、“N2的”は入れ替えることはできない。

以上はN1/N2 とNの八種類の所属関係の入れ替え状況の分析であるが、その中には例外もある。

3.1.2.2 比較値(W) についての研究

3.1.2.2.1 任海波(1987)による研究

任海波は比較構文の比較値(W)を「AP」、「VP」、「AV」、「NP」の四つの類型に分けている。比較値APは形容詞性の述語だけを含む。比較値VPは動詞性の述語だけを含む。また、比較値AVは形容詞性と動詞性の両方の述語を含む。比較値NPは名詞連語を被修飾語とする。さらに、この四種の比較値で構成される比較構文の統語構造と意味特徴を論じた。それぞれの構造は次の図6になる。

図 6

	構 造	用 例
AP 比較値	AP→(d)AP(了)	这东西 <u>比</u> 以前贵了。(このものは以前より高くなった。)
	AP→(d)AP $\left\{ \begin{array}{l} \text{了} \\ \text{出} \end{array} \right\}$ nm(NP)(了)	他 <u>比</u> 过去胖了一些。(彼は過去より少し太くなった。)
	AP→(d)AP $\left\{ \begin{array}{l} \text{多了} \\ \text{得多(了)} \end{array} \right\}$	雨 <u>比</u> 刚才小多了。(雨は先程より弱くなった。)
VP 比較値	VP→V $\left\{ \begin{array}{l} \text{了 (nm)} \\ \text{nm} \end{array} \right\}$ (NP)	后面的概念都 <u>比</u> 前面的概念增加了限制词。(後ろの概念はすべて前の概念より制限詞が増えている。)
	VP→(d)V $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ \text{(nm)} \end{array} \right\}$ (了)	小静 <u>比</u> 别人喜欢读书。(静ちゃんは他の人より本を読むことが好きだ。)
	VP→(d)Aux VP(nm)(了)	他 <u>比</u> 以前会说一些了。(彼は昔よりちょっと喋れる。)
AV 比較値	AV→(d)A $\left\{ \begin{array}{l} \text{(nm)VP} \\ \text{(了 nm)VP} \\ \text{V(nm)} \\ \text{V(了 nm)} \end{array} \right\}$	张老师 <u>比</u> 我早去了三分钟。(張先生は私より三分ほど早く行った。)
	AV→d A 地 VP(了)	丽花爱他，真心地爱他，这 <u>比</u> 青年人做出风流事情更深地伤了瞎子的心。(麗花は彼のことが好きで、本心から好きだ。これは若い者が色事をするよりもっと目が不自由な人の心を傷つけた。)
	AV→(VP) V 得 (d) A (了) (nm)	他 <u>比</u> 你挣钱挣得多。(彼は君よりよく金を稼ぐ。)
	AV→d V 得 A (了)	安達显然 <u>比</u> 她放得开。(安達は明らかに彼女よりあきらめがよい。)
	AV→d 让 NP $\left\{ \begin{array}{l} \text{(V)A} \\ \text{ID} \end{array} \right\}$ (了)	这 <u>比</u> 你招待我一只烤全羊还让人高兴呢。(これは羊の丸焼きで招待するより喜ばしい。)
NP 比較値	NP→d NP	你 <u>比</u> 国民党还国民党。(君は国民党より国民党らしい。)

(d:程度副詞、A:形容詞、V:動詞、Aux:助動詞、ID:固定連語、nm:数量連語あるいは数量を表す形容詞連語、O:目的語、→:左側の項は右側の項に書き換える、{ }:必ず一つの項を選ぶことを表す、():省略できる)

3.1.2.2.2 邵敬敏(1992)による研究

邵敬敏氏は意味論により、“比”構文の助動詞の制限から着手し、“比”構文の構造(“X₁比X₂Y”)における助動詞の位置の変化および文型構造に与える影響を考察した。邵敬敏氏は比較構文の中の助動詞の位置は“比”の前(a位置)と“Y”の前(b位置)の二種に分けた。すなわち、a位置は「X₁Z比X₂Y」であり、b位置は「X₁比X₂Z Y」である(Zは助動詞)。さらに、助動詞Zを“主観意識を表す助動詞(Z1)”と“客観意識を表す助動詞(Z2)”に分け、比較値Yを“動詞性(V)”と“形容詞性(A)”に分けた。Zの類別、Yの性質およびZの位置の組み合わせを基準とし、比較構文が成立できるかどうかについて論じた。

(a) 状況一: Zはa位置において、Y=Vの場合

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| *他能 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他要比我说/说话/说大话。 |
| *他敢 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他该 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |
| *他肯 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他可 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |
| *他会 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他应当 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |
| *他愿意 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他可以 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |

(b) 状況二: Zはa位置において、Y=Aの場合

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 他能 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他该 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他敢 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他应该 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他肯 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他可 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他会 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他可以 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他愿意 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他应当 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他要 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | |

(c) 状況三: Z1はb位置において、Y=Vの場合

他比我能说/说话/说大话。

他比我敢说/说话/说大话。

他比我肯说/说话/说大话。

(d) 状況四: Z2はb位置において、Y=Vの場合

*他比我要说/说话/说大话。

*他比我该说/说话/说大话。

*他比我应该说/说话/说大话。

他比我会说/说话/说大话。

他比我愿意说/说话/说大话。

他比我要说/说话/说大话。

*他比我可说/说话/说大话。

*他比我可以说/说话/说大话。

*他比我应该说/说话/说大话。

(e) 状況五: Zはb位置において、Y=Aの場合

? 他比我能早/早来/来得早。

? 他比我敢早/早来/来得早。

? 他比我肯早/早来/来得早。

? 他比我会早/早来/来得早。

? 他比我愿意早/早来/来得早。

他比我要早/早来/来得早。

? 他比我该早/早来/来得早。

? 他比我应该早/早来/来得早。

? 他比我可早/早来/来得早。

? 他比我可以早/早来/来得早。

? 他比我应该早/早来/来得早。

以上の用例の考察を通して、邵敬敏は以下の結果を出した。

図 7

位置	a	b	文型
Z1	-	+	V
Z2	-	+	
	+	?	
	+	?	
類別	A		性質

(Z:助動詞、Z1:主観意識を表す助動詞、Z2:客観状態を表す助動詞、A:形容詞、V:動詞あるいは動詞連語、位置a:Zが“比”の前に位置する(“X1Z比X2Y”)、位置b:Zが“比”の後ろに位置する(“X1比X2ZY”)、X1:比較主体、X2:比較客体、Y:比較値、+:文型が成立できる、-:文型が成立できない、?:疑問がある)

図7について、邵敬敏は三つの角度から説明した。

その一はZの位置を出発点とする角度である。Zがaに位置するとき、YがVになるものとYがAになるものと対立する。Zがbに位置するとき、

YがVであれば、Z₁とZ₂は対立する。YがAであれば、Z₁とZ₂は対立しない。

その二はYの性質を出発点とする角度である。YがVであれば、Z₁はaに位置することとbに位置することと対立する。YがAであれば、Zはaに位置することとbに位置することと対立する。

その三はZの性質を出発点とする角度である。Z₁とZ₂はaに位置するとき、差異がない。Z₁とZ₂はbに位置するとき、YはAであれば、対立しない。YはVであれば、対立する。

さらに、“比”較文の成立のキーポイントは比較値の中に比較ができ、かつ程度の差異を表す成分があるということを指摘した。この成分には性質形容詞、心理を表す動詞以外に、意識助動詞と程度副詞の“更”がある。

3.1.2.2.3 邵敬敏・刘焱(2002)による研究

邵敬敏・刘焱氏は比較構文の意味上の表現条件と比較値を認知上から解釈した。同時に、比較値と「比較の結果」、「比較の属性」、「比較の差の値」、「比較点」、「比較項目」との関係について分析した。

(64) 书你比他多。(本について、君は彼より多い。)

“书”は「比較点」であり、ここで比較するのは“书(本)”の数量である。

3.2 比較構文に関する通時的な研究

中国語の比較構文に関する通時的な研究は二十世紀八十年代から行われている。学者たちの関心は比較構文の出所、変遷および外部的と内部的な変化の要因についてである。研究方法は主に文法化の理論を運用し、中国語の比較標識の出現時期について論じている。

3.2.1 黄晓惠(1992)による研究

黄晓惠は現代中国語の差異比較構文の形式が漢魏六朝の広範比較構文(“泛比句”)から生じ、この文型は平等比較、差異比較と最上級比較など

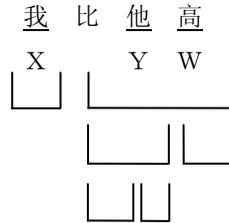
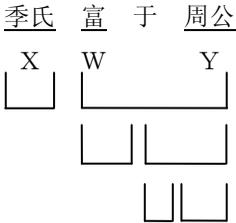
の意味範疇を表すことができることを指摘した。古代中国語の差異比較文の「(X)W于/如Y」文型は絶えずそれと意味的にかかわる古代中国語の連動式述語文をもとにして、自身の意味範囲の縮小と意味の中心位置の後ろへの転移と、最後に範囲比較構文の文型が差異比較の意味だけを表示することになる過程を完成させたことを述べた。同時に、“比”も完全に差異を表す文法化標識に虚詞化したと述べている。広範比較構文(“泛比句”)の構造は「(X)比YW」である。

(65) 周顛^{しゅうてん}比^ひ臣^{しん}, 有^ひ国士^{こくし}門風^{もんふう}有^あり。(周顛は臣に比すれば、国士の門風有り。)

X Y W

(『世说新语』9・14)

また、黄晓惠は古代中国語と現代中国語の差異比較構文の構造の違いを比較した。



古代中国語と現代中国語の差異比較構文の構成成分は同じである。両者の違いは次のようである。

(一) 語順が異なる。

古代差異比較構文の語順は「(X)W于/如Y」の「順行構造」であり、現代差異比較構文の語順は「(X)比YW」の「逆行構造」である。

(二) 接続詞が異なる。

古代差異比較構文の接続詞は「于」あるいは「如」であり、現代差異比較構文の接続詞は「比」である。

(三) 比較説明項Wの構成成分が異なる。

古代差異比較構文の比較説明項Wの構成成分はほぼ形容詞性の成分であ

り、 $[+A-V]^4$ を表現している。現代差異比較構文の比較説明項Wの構成成分は「A」と「V」を含み、 $[+A+V]$ を表現している。

3.2.2 史佩信(1993)による研究

史佩信氏は古代中国語の比較構文は比較動詞文の構造の拡大、意味機能の転移および文型意味の拡大を発展させて形成したものであると考えている。さらに、古代中国語の比較構文が誕生した年代は先秦の時代であるということを確認した。

3.2.3 李讷・石毓智(1998)による研究

李讷氏と石毓智氏は比較構文の変遷過程の考察を通して、比較構文の形成過程について解釈をした。彼らは文法発展の体系性を重視し、比較構文の発展はその体系性の発展の一部と考えている。従って、中国語の述語動詞が遊離の状態から連続に変わり、述語のうしろの前置詞構造が述語の前に移動する影響で、比較標識の“于”が消えてしまうと述べた。このため、新しい構造を探索し、比較構造を表示する必要がある。ここから、変化が起った。先秦の時代に一般動詞“比”は連動式の第一の動詞の位置を占め、時間の経過により、だんだん新しい比較の標識になった。

3.2.4 谢仁友(2004)による研究

谢仁友氏は宋元時代の差異比較構文について論じた。この時期の“比”構文、“如”構文と“似”構文について、詳しく説明し、差異比較構文の文型をまとめた。谢氏は差異比較を表す“如”構文は戦国時代にも存在していたことを明示した。たとえば、“人之穷困，甚于饥寒(『吕氏春秋』)”である。さらに差異比較を表す“似”構文は唐の時代に生まれたと考えている。その理由の一つを“如”構文の類推の影響を受けたことであると考えている。“如”構文はVPの比較によく用いられ、“似”構文はNPの比較

⁴ 「A」は形容詞性の成分を指し、「V」は動詞性の成分を指す。

によく用いられる。

3.2.5 蔣紹愚・曹広順(2005)による研究

蔣紹愚氏と曹広順氏は『馬氏文通』の研究に基づいて、平等比較構文と差異比較構文の構造の歴史的変遷について研究した。

4. 比較構文に関する考察

4.1 比較構文の論理構造

以上の先行研究から分かったのは、比較構文の構成要素は「比較主体(X)」、「比較客体(Y)」、「比較詞」、「比較点(D)」、「比較値(W)」の五つといることである。従って、自然言語においては、一般の比較構文の構造は「X+比較詞+Y(+D)+W」であると定義しうる。本稿では「述語論理」を用いて、比較構文の各項の関係を明示する。述語論理においては、文の意味(命題)は「関数(functions)」と「引数(arguments)」⁵からなる「式(form)」によって表される。理論上は、関数の種類はそれが伴う引数の数だけ存在してよいが、自然言語の文の意味表示においては、「一項関数」、「二項関数」、「三項関数」の三種類にとどめるのが一般的である。論理構造からみると、比較構文は「三項関数⁶」に属する。具体的表示は「比較詞'(α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)」になる。この α は「比較主体(話題)」であり、 β は「比較客体(副話題)」であり、 $\gamma 1$ は「格役割」を表し、 $\gamma 2$ は「数量化」を表し、 $\gamma 3$ は「着点」を表す。 $\gamma 1$ 、 $\gamma 2$ と $\gamma 3$ は γ からの拡張と考える。従って、比較構文の論理式は「拡張三項関数」と言ってもよい。

ここで、前述の例を形式意味論の技法である命題論理と述語論理を使用

⁵ 一般的にはそれぞれ「述語(predicates)」、「項(arguments)」と呼ばれるが、本稿では「関数」、「引数」とする。

⁶ 邹崇理は『自然言語的逻辑分析』の中で、「三項関数」について以下のように論じている。“Mary shakes John awake”はDowtyの体系の中では“[shake*(m,j) CAUSE BECOME awake(j)]”のように翻訳される。「mが指示する個体」が「jが支持する個体」を「ゆすぶること」が「jが指示する個体が目ざめる」という状態を発生させると理解される。これは三項関数では“使’(shake’(m,j),j,awake’(j))”のようになる。(邹崇理 2000:377)

して、論理式で表記する⁷と、本章の用例 (7) の構造は次のように分析すればよい。

$$\begin{array}{cccccccc}
 \sim\text{ト} & & \text{アリ} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \text{アル} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} \\
 (7') \text{比}' & [\text{张三}, \text{李四}, \text{有}' & (\text{张三}, [\text{个子}1]) & \& \text{有}' & (\text{李四}, [\text{个子}2]) & \& \\
 \text{アル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ト} & & & & & \\
 & \alpha & \beta & & & \gamma 1 & & \\
 & & \text{ヒク} & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} & & \text{ナル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} \\
 \text{有}' & \{\text{減}' & ([\text{个子}1], [\text{个子}2]), & [\text{差数}] & \& \text{到}' & ([\text{差数}], \text{多少}) & \} \\
 \text{アル} & & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & & & \\
 & & & & & & \sim\text{トイウ状態} & \\
 & & \gamma 2 & & & & & \gamma 3
 \end{array}$$

(本稿では関数と引数の表示には中国語の漢字をそのまま用いるが、関数には右上にプライム⁷」を付して引数と区別する表示法を採用する。「[]」の中身は第一項の個体の有する論理形式の集合、すなわち属性を表し、従って「属格(対象格)」と言ってよい。論理式の下に付された日本語はメタ言語による意味注釈である。以下の論理式も全て同様である。)

ここの(7')は例(7)の論理式である。ウィトゲンシュタインの論理的構文論においては、記号の意味が役割を果たすようなことがあってはならない。論理的構文論は記号の意味を論じることなく立てられねばならず、そこではただ諸表現を記述することだけが前提にされうる(野矢訳 2003 三・三三)。この式の中の“比'、有'、減'”は函数を表す。この文は「张三が李四より背が高い」という命題内容は論理式では「比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子1]) & 有' (李四, [个子2]) & 有' {減' ([个子1], [个子2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)}」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (张三, [个子1])」は「张三には[个

⁷『論理哲学論考』では、論理的分析方法について、「こうした誤謬を避けるため、異なるシンボルに同じ記号が使用されていたり、表現の仕方の異なる記号が同じ仕方で使用されているかのような見かけをもっていたりすることのない誤謬を排した記号言語、すなわち、論理的文法—論理的構文論—を忠実に反映した記号言語を用いなければならない。」と論じている。(野矢訳 2003 三・三二五)

子1]がある」の意を、「有’（李四，[个子2]）」は「李四には[个子2]がある」の意を、「有’{減’（[个子1]，[个子2]），[差数]}&到’（[差数]，多少）」は「[个子1]から[个子2]を引くと差がある」の意を表す。用例(7)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「张三」と「李四」が「経験者格」を、「个子1」と「个子2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

総体的に考えると、論理式(7’)は「 α ガ β ト γ トイウ状態ニアル」の命題内容を表している。なお、式で“減’”を使うのは、邱鴻康(2002)による、「“…A比B…”という形は、「AとBには差がある」という意味を表す」という記述に依拠している。

同様に、例(8)の論理式は次のように書ける。

~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(8’) 像’ [妹妹，姐姐，有’（妹妹，[漂亮1]）&有’（姐姐，[漂亮2]）&						
アル	~ガ	~ト				
α	β				$\gamma 1$	
ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ	
有’ {減’（[漂亮1]，[漂亮2]），[差数]}&到’（[差数]，零）]						
アル	~ニ	~ガ				
~トイウ状態ニ						
$\gamma 2$			$\gamma 3$			

この文の「妹は姉のように綺麗だ」という命題内容は論理式では「像’ [妹妹，姐姐，有’（妹妹，[漂亮1]）&有’（姐姐，[漂亮2]）&到’{減’（[漂亮1]，[漂亮2]），[差数]}&到’（[差数]，零）」のように表示できる。この論理式について詳しく説明してみよう。「有’（妹妹，[漂亮1]）」は「妹妹には[漂亮1]がある」の意を、「有’（姐姐，[漂亮2]）」は「姐姐には[漂亮2]がある」の意を、「到’{減’（[漂亮1]，[漂亮2]），[差数]}&到’（[差

距], 零]]」は「[漂亮 1]から[漂亮 2]を引いて差がゼロになる」の意を表す。この“到”は「成る」の意を表す。用例(8)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「妹妹」と「姐姐」が「経験者格」を、「漂亮 1」と「漂亮 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がないこと、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

4.2 比較構文に関するタイプ理論分析

ここでは、方立(2000)の中で紹介されているタイプ理論に基づいて、比較構文を分析する。方立は『逻辑语义学』の第四章の中でタイプ論理言語 L_t の生成式について詳しく論じた。タイプ言語 L_t はラッセル (Russell) のタイプ理論に基づいており、「タイプ論理言語」とも呼ぶ。 L_t にはたくさんの特徴があり、その一つは無限の論理タイプを持つことである。それ以外、 L_t においては个体語と述語に定項と変項の区別があるだけでなく、ほかの品詞にも定項と変項に区別される。注目すべき点はすべての変項は定項を適用することができるということである。このような論理言語は「高階の述語論理」という。個体にだけ変項と定項の区別があり、変項が定項にのみ適用することができる述語論理は「一階の述語論理」という。个体語と述語のどちらにも変項と定項の区別があり、変項が定項に適用することができるのは「二階の述語論理」という。(方立 2000:88-89)

一階の述語論理 L_2 の統語部分において、おもに以下のような四種の論理タイプがある。个体定項(entity)は「e」で表示し、式(truth)は「t」で表示し、n項述語は「predn(e1,e2,...en)」で表示し、一項述語、二項述語と三項述語を含む。結合詞は一項結合詞「 \rightarrow 」と二項結合詞「 \wedge 」、「 \vee 」、「 \rightarrow 」、「 \leftrightarrow 」を含む。(方立 2000:89)

(e, t) のような括弧が付いているのは「派生タイプ」、あるいは「複合タイプ」という。「e」は「インプットタイプ」、「t」は「アウトプットタイプ」という。すべての派生タイプは以下のように分析ができる。

派生タイプ = 〈インプットタイプ, アウトプットタイプ〉

派生タイプの内部構造は複雑さにかかわらず、必ず一種の二項関係を表す。当然、インプットタイプは派生タイプである可能性もある。(方立 2000:90)

次に、一項述語、二項述語と三項述語について説明する。

〈e, t〉は個体定項 (e) と結合し、式 (t) を生じることができる。ここからみると、〈e, t〉は一項述語である。

〈e, 〈e, t〉〉は個体定項 (e) と結合し、一項述語 (〈e, t〉) が生じ、〈e, t〉はまた個体定項 (e) と結合し、式 (t) が生じる。つまり、〈e, 〈e, t〉〉は二項述語である。

〈e, 〈e, 〈e, t〉〉〉は個体定項 (e) と結合し、二項述語 (〈e, 〈e, t〉〉) が生じ、〈e, 〈e, t〉〉は個体定項 (e) と結合し、一項述語 (〈e, t〉) が生じ、〈e, t〉はさらに個体定項 (e) と結合し、式 (t) が生じる。〈e, 〈e, 〈e, t〉〉〉は三項述語である。(方立 2000:90)

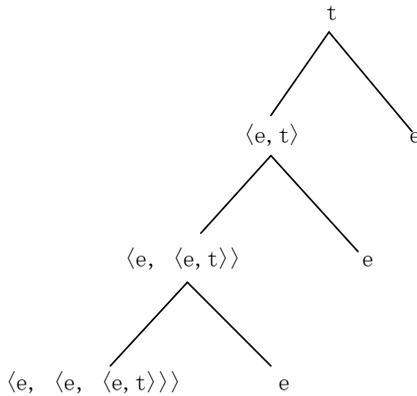
〈e, 〈e, 〈e, t〉〉〉を例とすると、これは三項述語を表示する以外に、以下の方式で式を生成する。(方立 2000:91)

- (66) a. 〈e, 〈e, 〈e, t〉〉〉 e = 〈e, 〈e, t〉〉
 b. 〈e, 〈e, t〉〉 e = 〈e, t〉
 c. 〈e, t〉 e = t

a、b、c のタイプの表現式の右側にスペースがあれば、そのうしろの「e」を引数として演算をする。引数「e」をスペースの前の関数に適用すると、イコールの右側の結果となる。

この過程は以下のような樹形図で表示することもでき、次の図 8 になる。(方立 2000:91)

図 8



関数は抽象的な概念である。従って、入力記憶により、式の生成の過程を項が絶えず消される過程をもつとみなすことができる。すなわち、三項述語を含む式の生成過程を表示すると、次のようになる。

- (67) a. $\langle \emptyset, \langle e, \langle e, t \rangle \rangle \rangle \neq \langle e, \langle e, t \rangle \rangle$
- b. $\langle \emptyset, \langle e, t \rangle \rangle \neq \langle e, t \rangle$
- c. $\langle \emptyset, t \rangle \neq t$

この生成の過程は樹形図で表示すると、図 9 のようになる。

図 9

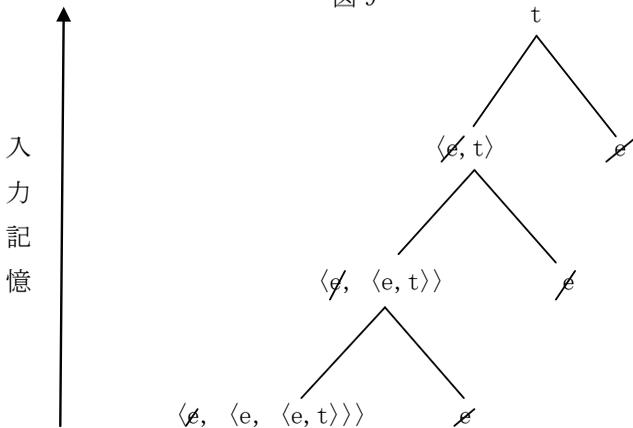


図9の入力記憶の過程は下から上へのボトムアップ型の過程と考える。
 (pp. 87-94 参照)

さて、そこでタイプ理論を用いて、次の三つの比較構文の論理タイプの表現式を入力記憶に基づいて分析する。

(68) a. 我比他年纪大。(私は彼より年上だ。)

この文のタイプ分析は樹形図で表示すると、図10となる。

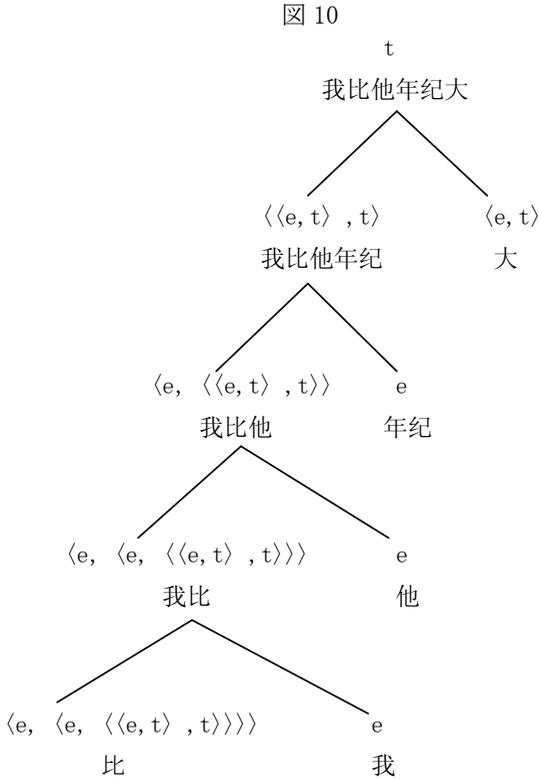


図10からみると、“比”の論理タイプの表現式は「<e, <e, <e, <(e,t), t>>>>」の四項述語であり、“我”、“他”と“年纪”は個体定項“e”であり、“大”は一項述語“<(e,t)”である。

この文の入力記憶はボトムアップ型であり、樹形図で表示すると図11

になる。

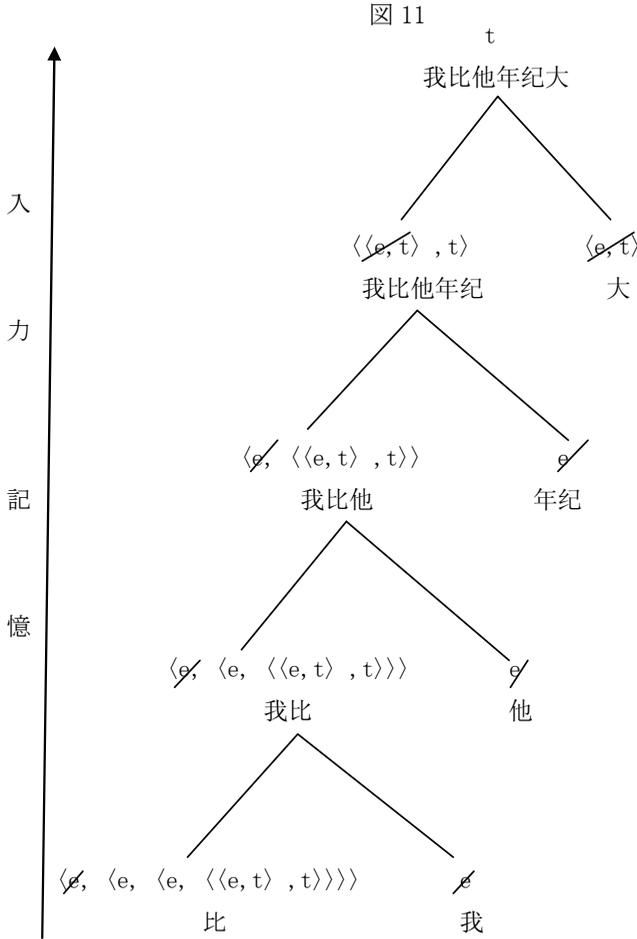


図 11 のように、(68-a)の文の入力記憶は最初“比”の“ $\langle e, \langle e, \langle e, \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle$ ”のタイプ式と個体定項の“我”(“e”)が結合し、“我比”の“ $\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”式になる。また、“我比”の“ $\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”のタイプ式と個体定項“他”(“e”)が結合し、“我比他”の“ $\langle e, \langle e, t \rangle, t \rangle$ ”の式になる。その後、“我比他”の“ $\langle e, \langle e, t \rangle, t \rangle$ ”のタイプ式と個体定

項“年纪”（“e”）が結合し、“我比他年纪”の“〈〈e,t〉,t〉”の式になる。最後に、“我比他年纪”の“〈〈e,t〉,t〉”のタイプ式と一項述語の“大”（“〈e,t〉”）が結合し、“我比他年纪大”（“t”）の式が生じる。次に、(80-b)を考える。
 (68) b. 我年纪比他大。（私の年は彼より上です。）

この文のタイプ分析は樹形図で表示すると、図 12 となる。

図 12

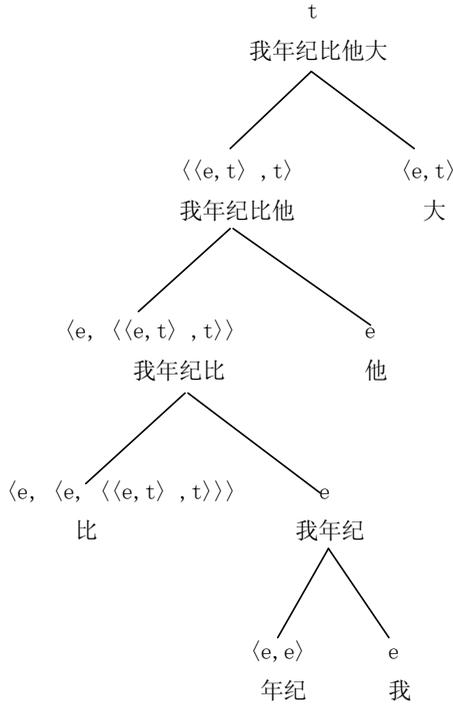


図 12 からみると、“比”のタイプ式は「〈e, 〈e, 〈〈e,t〉,t〉〉」の三項述語であり、“我”と“他”は個体定項“e”であり、“年纪”は複合定項“〈e,e〉”であり、“大”は一項述語“〈e,t〉”である。

この文の入力記憶は以下の図 13 になる。

図 13

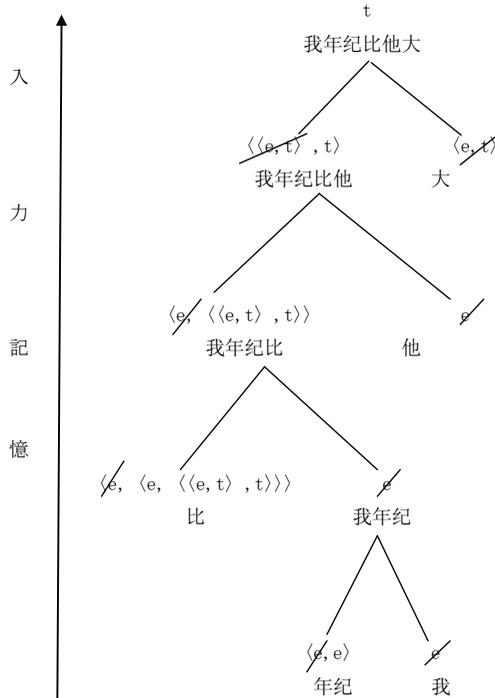


図 13 のように、(68-b)の文の入力記憶は最初複合定項 “⟨e,e⟩” の “我” と個体定項の “年纪” (“e”)が結合し、個体定項 “e” の “我年纪” になる。また、“比” の “⟨e, ⟨e, ⟨⟨e,t⟩, t⟩⟩” のタイプ式と個体定項 “我年纪” (“e”)が結合し、“我年纪比” の “⟨e, ⟨⟨e,t⟩, t⟩⟩” の式になる。その後、“我年纪比” の “⟨e, ⟨⟨e,t⟩, t⟩⟩” のタイプ式と個体定項 “他” (“e”)が結合し、“我年纪比他” の “⟨⟨e,t⟩, t⟩” の式になる。最後に、“我年纪比他” の “⟨⟨e,t⟩, t⟩” のタイプ式と一項述語の “大” (“⟨e,t⟩”)が結合し、“我年纪比他大” (“t”)の式が生じる。次に、(68-c)を見てみよう。

(68) c. 年纪上我比他大。(年齢において私は彼より年上だ。)

この文のタイプ分析は樹形図で表示すると、図 14 となる。

図 14

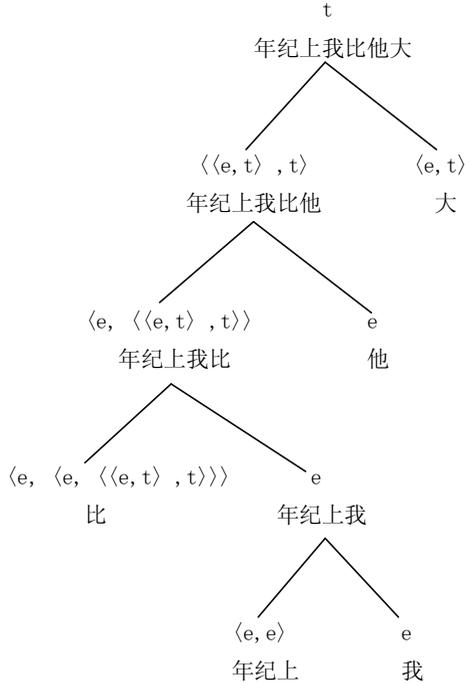


図 14 からみると、“比”のタイプ式は「 $\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ 」の三項述語であり、“我”と“他”は個体定項“e”であり、“年纪上”は複合定項“ $\langle e, e \rangle$ ”であり、“大”は一項述語“ $\langle e, t \rangle$ ”である。

この文の入力記憶は下の図 15 になる。

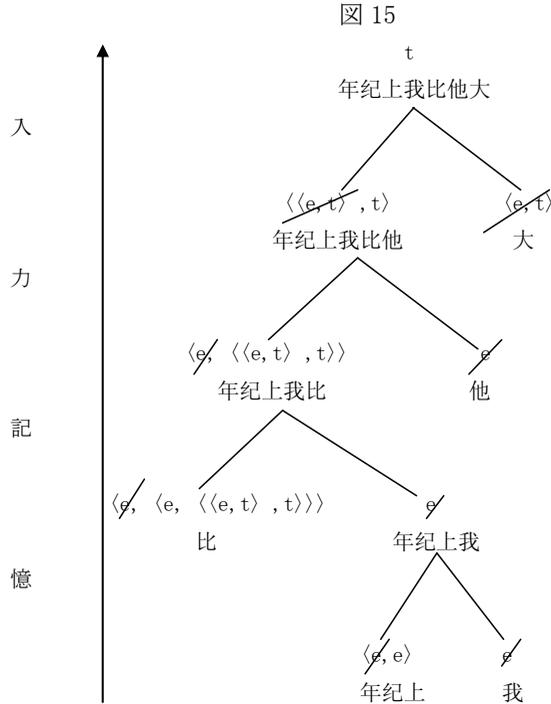


図 15 のように、(68-c)の文の入力記憶は最初複合定項“ $\langle e, e \rangle$ ”の“年纪上”と個体定項の“我”(“ e ”)が結合し、個体定項“ e ”の“年纪上我”になる。また、“比”の“ $\langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”のタイプ式と個体定項“年纪上我”(“ e ”)が結合し、“年纪上我比”の“ $\langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”の式になる。その後、“年纪上我比”の“ $\langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”のタイプ式と個体定項“他”(“ e ”)が結合し、“年纪上我比他”の“ $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ ”の式になる。最後に、“年纪上我比他”の“ $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ ”のタイプ式と一項述語の“大”(“ $\langle e, t \rangle$ ”)が結合し、“年纪上我比他大”(“ t ”)の式が生じる。

4.3 有限オートマトンによる比較構文の入力記憶の分析

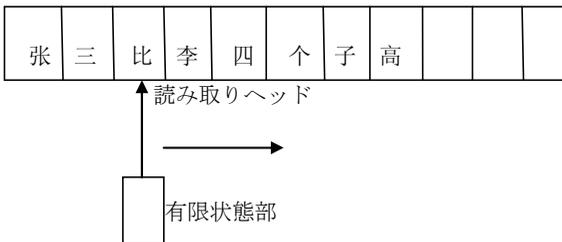
4.3.1 有限オートマトンとは何か

オートマトン(automaton, 複数形は automata)は、情報科学では抽象的な有限状態の順序機械であるが、もともとの意味は、オルゴールとともにヨーロッパで発達してきた華麗な自動人形である(小倉 1996:88)。ここでは文法から生成される文をコンピュータで認識するためには、どのようなメカニズムが必要であるかを考える。

この目的のための抽象的な機械は有限オートマトン(finite automaton、以下FAと書く)と呼ばれる。なおオートマトンは計算機科学に近い話題であり、従来の言語学にはそれほどなじみがないが、今後は基礎知識として必須の分野であると考えられる。有限オートマトンは次の図16のようにモデル化することができる。

図 16

入力テープ



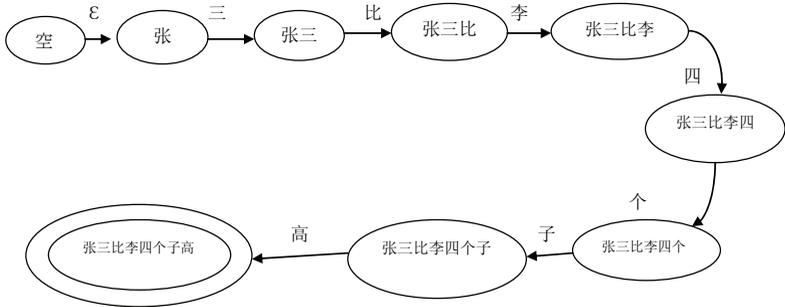
有限オートマトンは「有限状態部」、「入力用の入力テープ」と「読み取りヘッド」を持つ有限状態機械で出力はない。

基本動作はつぎのようである。まずヘッドが一文字ずつ読み取って有限状態部に送り、右隣のマスに移動する。有限状態部は入力を受け取ると、そのときの状態と入力記号からつぎの状態を決定し、その状態へ遷移する。これを繰り返す、入力文字列が終わる(入力文字列の後の空白記号を受け取る)と停止する。停止したときの状態が受理状態ならば、入力語を受理する(accept)といい、そうでなければ受理しないという。(小倉 1996:89)

4.3.2 状態遷移について

ここでは、「张三比李四个子高」の文の成立の状態遷移を説明する。状態遷移図は小倉 1996 に従って作成した。

図 17



小倉 1996 では状態遷移について「順序機械と同じく、状態を節点に対応させ、状態遷移を有向辺に対応させたグラフで表す。初期状態は始点が空で初期状態を終点とする有向辺を付けて示す。この有向辺の辺ラベルには空記号“ε”をつける(つけないこともある)。節点ラベルとして状態名を書く(書かない場合もある)。状態遷移を表す有向辺は入力記号をラベル“三”、“比”、“李”、…“高”とする。受理状態は節点を表す○印を◎とする。」と述べ、さらに「状態遷移図は F A の状態、入力記号、可能な状態遷移、初期状態、受理状態がすべて図示されるから、状態遷移図を示すことによって F A を定義してしまいうことができる。(小倉 1996:90)」と説明している。

4.3.3 「順序論理回路」とは何か

小倉 1996 によると「その時の入力だけでは出力が決まらず、過去の入力にも依存するような回路を「順序論理回路(sequential circuit)」と呼ぶ。順序論理回路の大きな特徴は「内部記憶(internal memory, メモリ)」を持っており、過去の入力系列の結果を保持している点にある。回路への入力とその時の記憶に応じて出力・応答を行うのである。記憶は入力によって変化する。(小倉 1996:84)」と述べられている。

また小倉 1996 では「順序機械(sequential machine)はこのような記憶のある回路や機械を抽象化したもので、入力記号によって変化し、過去の入力の状況を記憶する内部状態を持ち、入力と内部状態に依存して、出力記号が決まるような記号処理機械である。(小倉 1996:84)」のように説明されている。

4.3.4 比較構文の順序論理回路

「张三比李四个子高」の文を順序論理回路に基づいて作成した論理式は次のようになる。

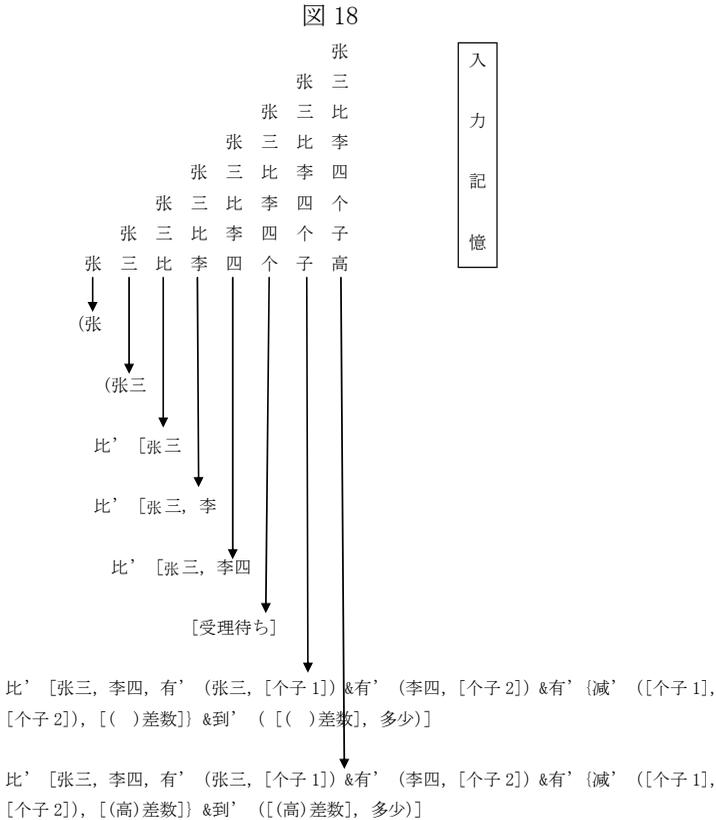
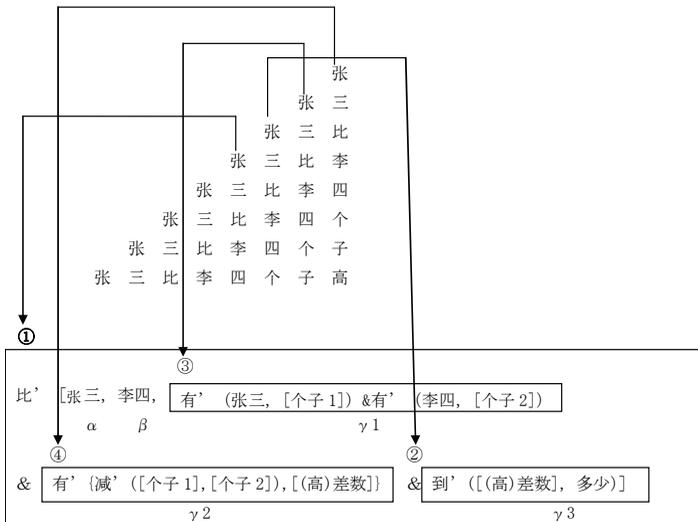


図 18 について説明しよう。図 18 の矢印の上の部分は自然言語を表し、下の部分は論理言語を表し、矢印は「対応する関係」を表す。まず“張”を入力し、論理式は“(張)になる。第二に“张三”を入力し、論理式は“(张三)になる。第三に“张三比”を入力し、論理式は“比’ [张三]”になる。第四に“张三比李”を入力し、論理式は“比’ [张三, 李]”になる。第五に“张三比李四”を入力し、論理式は“比’ [张三, 李四]”になる。第六に“张三比李四个”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第七に“张三比李四个子”を入力し、論理式は“比’ [张三, 李四, 有’ (张三, [个子 1]) &有’ (李四, [个子 2]) &有’ {減’ ([个子 1], [个子 2]), [()差数]} &到’ ([()差数], 多少))”になる(ここの括弧の中は空白である)。最後に“张三比李四个子高”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比’ [张三, 李四, 有’ (张三, [个子 1]) &有’ (李四, [个子 2]) &有’ {減’ ([个子 1], [个子 2]), [(高)差数]} &到’ ([(高)差数], 多少))”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 19 になる。

図 19



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で γ' [α , β , γ_1 & γ_2 & γ_3]の三項函数が、第二に②で γ_3 の「着点」が、第三に③で γ_1 の「格役割」が、第四に④で γ_2 の「量化」が決定される。

4.4 「比較構文」と「比喩構文」の比較

4.4.1 先行研究

“比喩”は「たとえる」ことである。すなわち、物事を説明するとき、相手のよく知っている物事を借用し、それになぞらえて表現することである。比較構文は修辞上の比喩と異なり、事物の間の程度、数量と性状などの異同あるいは優劣について客観的に論述することであり、陳述文を作る。比喩構文は一般的に二つの事物の比較を行い、説明を中心とする。それは主観性がきわめて強く、説明文に属する。しかし、この両者は文型が似ており、さらに同じ形式標識を用いるため、自然言語においては区別しにくい。

中国語における比較構文の文型は比較を表すことができ、また比喩を表すこともできる。この両者のちがいについて、研究者たちは以下のように論じた。

呂叔湘氏(1942)は比喩構文は比較構文の下位類であると考えている。

朱德熙氏(1982)は「跟…一样」の文型は比較と比喩の両方の意味を表すということを指摘した。この両者のちがいはアクセントにより表現される。比較を表す文型のアクセントは“一样”につける。比喩を表す文型のアクセントは“跟”の後ろの名詞につける。直接構成素は比較を表す文型は「(跟+N)+一样」であり、この述語部分は連述構造である。比喩を表す文型の構造は「跟+(N+一样)」であり、この述語部分の構造は述語目的語構造である。

(69) 这里的耗子和猫一样(大)。(ここの鼠は猫のように大きい。)

朱德熙の分析によると、例(69)は比喩構文であり、その構造は“(这里的耗子) {和(猫一样)+大}”である。ここの“和”は“像”に書き換えでき、“一样”は“似的”に書き換えできる。ここで、この文の論理式を書こう。

～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
(69') 和' [这里的耗子 ⁸ , 猫, 有' (这里的耗子, [大1]) &有' (猫, [大2]) &						
アル	～ガ	～ト				
α	β	$\gamma 1$				
	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ
	有' {減' ([大1], [大2]), [差数]} &到' ([差数], 同級)]					
アル	～ニ	～ガ				
		～トイウ状態ニ				
$\gamma 2$			$\gamma 3$			

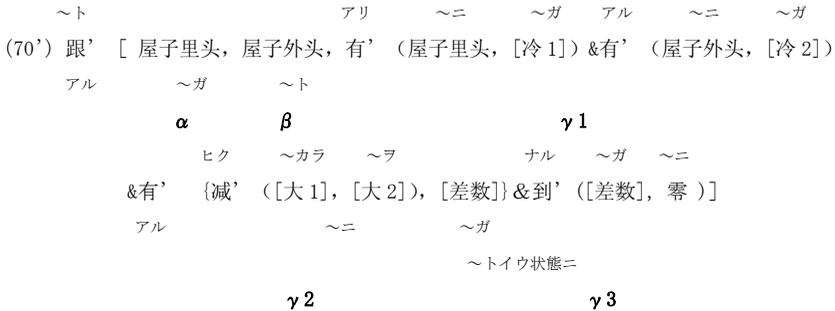
(69') の「この鼠は猫のように大きい」という命題内容の論理式では「和' [这里的耗子, 猫, 有' (这里的耗子, [大1]) &有' (猫, [大2]) &有' {減' ([大1], [大2]), [差数]} &到' ([差数], 同級)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (这里的耗子, [大1])」は「“这里的耗子”には[大1]がある」の意を、「有' (猫, [大2])」は「“猫”には[大2]がある」の意を、「有' {減' ([大1], [大2]), [差数]} &到' ([差数], 同級)」は「[大1]から[大2]を引いて差が“同級”になる」の意を表す。ここの“到'」は「成る」の意を表す。用例(69)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「这里的耗子」と「猫」が「経験者格」を、「大1」と「大2」が「対象格」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は実物の差ではなく、類似点の差がないこと、すなわち“同級”になる。言い換えれば「類似点の差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

(70) 屋子里头跟屋子外头一样(冷)。(部屋の中は部屋の外と同じ寒さだ。)

朱德熙の分析では、例(70)は比較構文であり、その構造は“(屋子里头)[跟屋子外头+(一样)冷]”である。ここの“跟”は“…と比較する”の意を表し、“…に似ている”の意を表す“像”に書き換えることができず、ま

⁸ 実は、“这里的耗子”の論理式は“有' (这里, 耗子)”である。しかし、ここの論述の中心は比較構文であるから、簡略的にそのまま“这里的耗子”と記する。ほかの論理式も同様である。

た“一样”も“似的”に書き換えられない。ここで、この文の論理式を書こう。



(70') は「部屋の中は部屋の外と同じ寒さだ」という命題内容は論理式では「跟' [屋子里头, 屋子外头, 有' (屋子里头, [冷 1]) &有' (屋子外头, [冷 2]) &有' {減' ([冷 1], [冷 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (屋子里头, [冷 1])」は「“屋子里头”には[冷 1]がある」の意を、「有' (屋子外头, [冷 2])」は「“屋子外头”には[冷 2]がある」の意を、「有' {減' ([冷 1], [冷 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)」は「[冷 1]から[冷 2]を引いて差がゼロになる」の意を表す。ここの“到'”は「成る」の意を表す。用例(70)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、γ 1 は「屋子里头」と「屋子外头」が「経験者格」を、「冷 1」と「冷 2」が「対象格」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2 は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3 は差がないこと、言い換えれば「実物の差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

殷志平氏(1995)は「X比Y还W」の文型は比較構文と比喩構文の両方がある。その両者の特徴を有していると指摘した。さらに、その原因を以下の二つの面から解釈できるとした。

第一は、比較構文においては、この構造のYはWが表示する性状と程度をもつ。なお、YはWが表示する[性状]・[程度]のある位置を占める。比喩

構文においては、特定の言語環境の中で、Yは最上級の[性状]・[程度]を持ち、Wが表示する[性状]・[程度]の両極端に位置する。よってつねに、YはXを超えるということである。

第二は、“X”と“Y”の関係からみると、比較構文の“X”と“Y”の比較は現物であり、比喩構文の“X”と“Y”の比較は現物ではなく、たとえた事物との比較である。さらに、以下の比較構文の用例をとりあげた。

(71) 山东队比河南队还快。(山東のチームは河南のチームより速い。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(71') 比'	[山东队, 河南队, 有'	(山东队, [(跑得)快慢 ^{19) <td>&有'</td> <td>(河南队, [(跑得)</td> <td>快慢^{2) <td>&有' {減' ([快慢¹⁾, [快慢²⁾], [差数]} &到' ([差数], 多少)</td>}</td>}	&有'	(河南队, [(跑得)	快慢 ^{2) <td>&有' {減' ([快慢¹⁾, [快慢²⁾], [差数]} &到' ([差数], 多少)</td>}	&有' {減' ([快慢 ¹⁾ , [快慢 ²⁾], [差数]} &到' ([差数], 多少)
アル	~ガ	~ト				
α	β		γ 1			
	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ
	アル	~ニ	~ガ			
				~トイウ状態ニ		
	γ 2			γ 3		

(72) 小张的孩子比小李的孩子还会哭。(張さんの子供は李さんの子供よりよく泣く。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ	
(72') 比'	[小张的孩子, 小李的孩子, 有'	(小张的孩子, [会哭 ^{1) <td>&有'</td> <td>(小李的孩子,</td> <td>[会哭^{2) <td>&有' {減' ([会哭¹⁾, [会哭²⁾], [差数]} &到' ([差数], 多少)</td>}</td>}	&有'	(小李的孩子,	[会哭 ^{2) <td>&有' {減' ([会哭¹⁾, [会哭²⁾], [差数]} &到' ([差数], 多少)</td>}	&有' {減' ([会哭 ¹⁾ , [会哭 ²⁾], [差数]} &到' ([差数], 多少)
アル	~ガ	~ト				
α	β		γ 1			
~ガ	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	
	アル	~ニ	~ガ			
				~トイウ状態ニ		
	γ 2			γ 3		

¹⁹⁾ 実は、“跑得快”の論理式は“得’(跑, 快)”である。しかし、ここの論述の中心は比較構文であるから、分かりやすくするためそのまま“跑得快”と記す。他の論理式もこれになる。

例(71)と(72)は比較構文である。例(71)の前提は“山东队跑得快（山東のチームは走りが速い）”であるが、最も“速い”ではない。なお、“山东队跑得快”と“河南队跑得快”の両者の比較は客観的に比較性があるものである。例(72)の前提は“小李的孩子会哭(李さんの子供は泣ける)”であるが、最も“泣ける”ではない。なお、“小张的孩子会哭”と“小李的孩子会哭”の両者の比較は客観的に比較性があるものである。

比喩構文は以下の用例をあげた。

(73) 我们的大“蜻蜓”仿佛比飞机还飞得高。(我々の“トンボ”はまるで飛行機より高く飛んだみたい。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ
(73') 比' [我们的大“蜻蜓”，飞机，有' (我们的大“蜻蜓”，[飞得高 1]) &有' (飞					
アル	~ガ	~ト			
α		β	γ 1		
~ガ	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ ~ニ
机，[飞得高 2]) &有' {減' ([飞得高 1], [飞得高 2]), [差数]} &到' ([差数], 超级)					
アル	~ニ		~ガ		
~トイウ状態ニ					
γ 2			γ 3		

(74) 他比眼镜蛇还毒。(彼はコブラよりもっと有毒だ。)

この文の論理式は次のようになる。

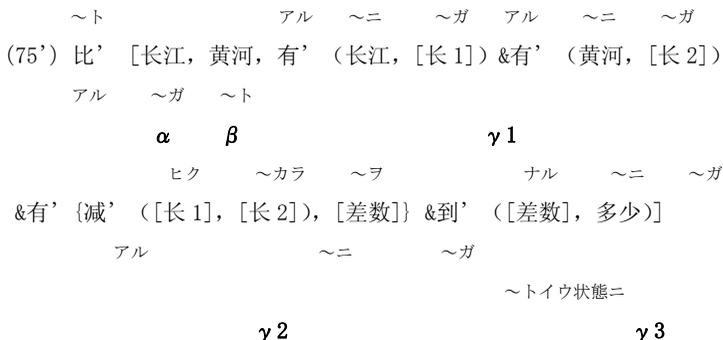
~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(74') 比' [他，眼镜蛇，有' (他，[毒 1]) &有' (眼镜蛇，[毒 2]) &						
アル	~ガ	~ト				
α		β	γ 1			
ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ	
有' {減' ([毒 1], [毒 2]), [差数]} &到' ([差数], 超级)						
アル	~ニ		~ガ			
~トイウ状態ニ						
γ 2			γ 3			

例(73)と(74)は比喩構文である。(73)の前提は「飞机飞得最高(飛行機が一番高く飛んだ)」である。一般的な状況において、飛行機と凧と比較すれば、必ず飛行機の方が高く飛んだはずである。話者は「我们的大“蜻蜓”仿佛比飞机还飞得高。(我々の“トンボ”はまるで飛行機より高く飛んだみたいだ。)」と言う文は事実とはかけ離れ、非客観的に凧と飛行機を比較し、誇張法を用いて凧が飛んだ高さを説明する。(74)の前提は「眼镜蛇最毒(コブラは一番有毒だ)」である。この文について、YはWで性質を持つが、XはWの性質を持たない。さらに、XとYも比較できるものではない。話者は「X比Y还W」の文型を用い、Yの性質を利用してXの性質を説明し、かつXはYを超えているということが分かる。この用法は話者の感情を表すためである。

陆俭明氏(1980)は比較の結果を表す“还”と“更”が比較と比喩を表示する機能をもつことについて論じた。“更”は比較を表す以外、「漸進」と「三者の比較」を表すこともできるとし、一方、“还”はこのような機能を持たないが、比喩を表すことができると述べた。

(75) 长江比黄河长, (长江) 比淮河就更长了。(長江は黄河より長く、淮河よりもっと長い。)

“更”を用いる例(75)は比較構文である。ここの“更”は“还”に書き換えることができず。この文の比較対象は“长江”、“黄河”と“淮河”の三つある。この三者は“长江>黄河>淮河”の「漸進」の関係である。この文の論理式は次のようになる。



しにくい。

王麗(2005)は「まず「比較」と「比喩」の定義から、両者のちがいをよく理解する方がいい」と述べている。つまり、「比較」は思惟の方式であり、「比喩」は修辞の方式であると説明している。

張厚軍(2010)は結果項の意味性から、比較構文と比喩構文を区別する基準の二点をまとめた。

一つの基準は「結果項の具体性」である。結果項が具体性を持たないか、あるいは具体的ではない文は比較構文である。結果項がはっきりしている、あるいは曖昧性を与える文は比喩構文であると見なした。そして、比喩構文と比較構文は具体的な用例を取り上げ説明した。

まず、比喩構文の用例は以下のようになる。

(77) 手如柔荑, 肤如凝脂, 领如蝤蛴, 齿如瓠犀。(手は柔荑¹⁰の如く、膚は凝脂¹¹の如く、領は蝤蛴¹²の如く、歯は瓠犀¹³の如く。¹⁴) (『诗经·卫风·硕人』)

この文の論理式は次のようになる。

～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
(77') 如' [手, 柔荑, 有' (手, [白嫩1]) & 有' (柔荑, [白嫩2]) &						
アル	～ガ	～ト				
α	β				γ1	
	ヒク	～カラ	～ヲ		ナル	～ガ ～ニ
	有' {減' ([白嫩1], [白嫩2]), [差数]} & 到' ([差数], 同级)					
アル		～ニ		～ガ		
				～トイウ状態ニ		
	γ2			γ3		

¹⁰ 荑は、茅(チガヤ)の葉より先に穂花を生じたもの。つばな。柔らかくて白いものの比喩となる。

¹¹ 獣の固まった脂肪。白く、柔らかく、しかもつやがある。

¹² 天牛(カミキリムシ)の幼虫。テッポウムシ。形態は白くてほっそりしている。

¹³ 瓠は Lagenaria siceraria var. clavata(ユウガオ)。ウリ科の一年草。一名、扁蒲・瓠瓜。瓠犀はユウガオの果実。細長い楕円形で、長さは六〇～九〇センチに達する。種子が潔白で整齊なので歯並びの美しさに例える。(『辞海』)

¹⁴ 『中国の古典 18・詩経(上)』加奈喜光訳(昭和五十七年)の日本語訳より。

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 如' [肤, 凝脂, 有' (肤, [细腻 1]) & 有' (凝脂, [细腻 2]) &
 アル ～ガ ～ト
α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' { 減' ([细腻 1], [细腻 2]), [差数] } & 到' ([差数], 同级)]
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3
 ～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 如' [颌, 蝻蛭, 有' (颌, [粉白 1]) & 有' (蝻蛭, [粉白 2]) &
 アル ～ガ ～ト
α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' { 減' ([粉白 1], [粉白 2]), [差数] } & 到' ([差数], 同级)]
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3
 ～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 如' [齿, 瓠犀, 有' (齿, [洁白整齐 1]) & 有' (凝脂, [洁白整齐 2]) &
 アル ～ガ ～ト
α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' { 減' ([洁白整齐 1], [洁白整齐 2]), [差数] } & 到' ([差数], 同级)]
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3

(78) 自在飞花轻似梦, 无边丝雨细如愁。(自在な舞う花はまるで夢のように降りつづき、細かい雨はまるで憂いのように細い。) (秦观『浣溪沙』)
 この文の論理式は次のようになる。

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 (79') 如' [布价, 往年的价钱, 有' (布价, [贵 1]) & 有' (往年的价钱, [贵 2]) &
 アル ～ガ ～ト

α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' {減' ([贵 1], [贵 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3

(80) 得志犬猫強似虎, 失时鸾凤不如鸡。(志を持つ犬と猫は虎のようになり、
 権勢や勢力を失う鳳凰は鶏に及ばない。) (『醒世姻缘传』)

この文の論理式は次のようになる。

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 (80') 似' [得志犬猫, 虎, 有' (得志犬猫, [強 1]) & 有' (虎, [強 2]) &
 アル ～ガ ～ト

α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' {減' ([強 1], [強 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 如' [失时鸾凤, 鸡, 有' (失时鸾凤, [身价 1]) & 有' (鸡, [身价 2]) &
 アル ～ガ ～ト

α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' {減' ([身价 1], [身价 2]), [差数]} & 到' ¹⁵([差数], 零)]
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3

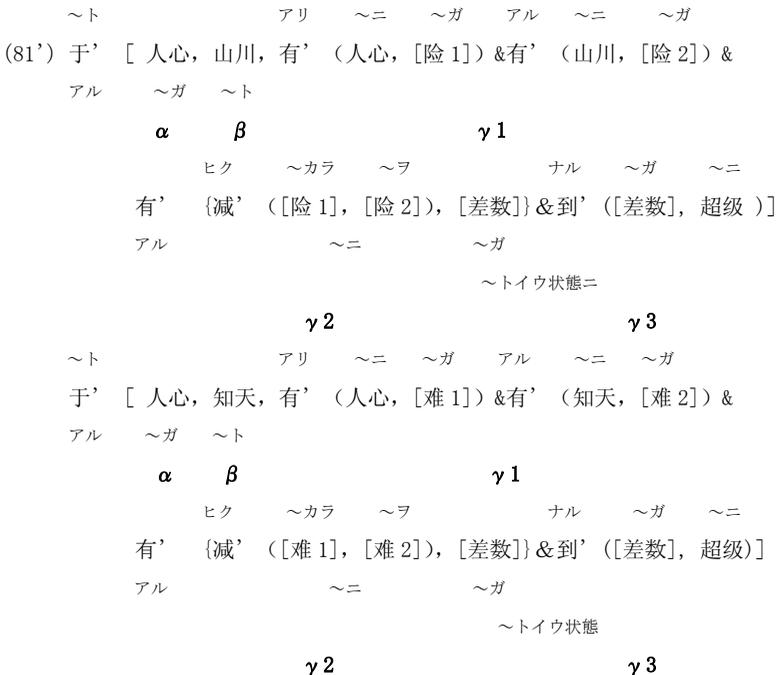
¹⁵ “~到' ”は「“到' ”の否定形」の意を表す。

例(79)、(80)は比較構文に属する。

もう一つの基準は「結果項の客観的比較性」である。文中で二つの事物に言及し、その二者が[客観的な比較性]を持つものは比較構文であり、[客観的な比較性]を持たないものは比喩構文である。さらに、比喩構文の用例を取り上げ説明した。

(81) 凡人心^{およ}险^{じんしん}于^{やまかわ}山川, 难于^{けわ}知天。(凡そ人心は山川よりも険しく、天を知るよりも難し。^{かなた}16) (『庄子・列御寇』)

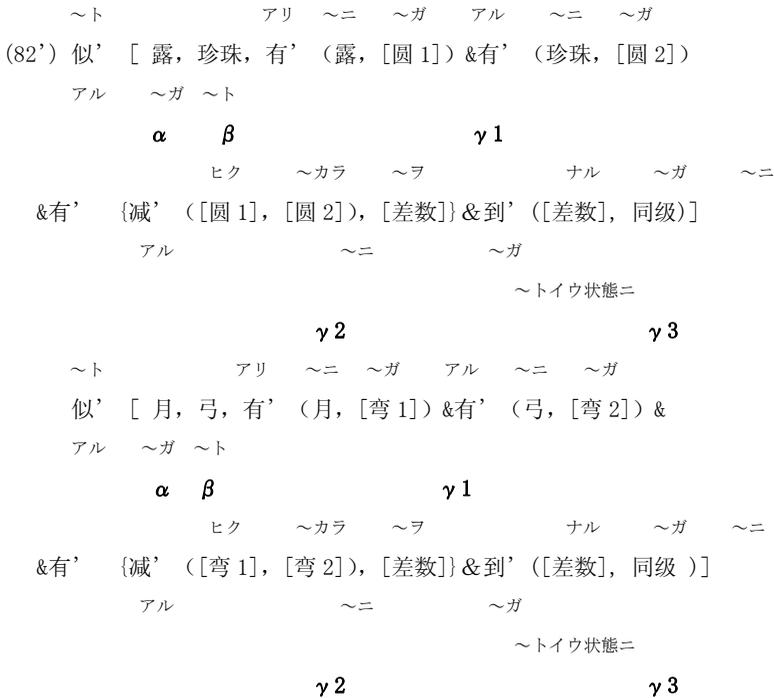
この文の論理式は次のようになる。



16 『中国の古典 5・庄子(上)』池田知久訳(昭和五十八年)の日本語訳より。

(82) 露似珍珠月似弓。(露は真珠に似ているし、月は弓に似ている。)(白居易『暮江吟』)

この文の論理式は次のようになる。



例(81)、(82)は比喩構文である。その中の“人心”と“山川”・“天”、“露水”と“珍珠”、“月”と“弓”は本質が異なる事物で、客観的な比較性を持たない。

次は、比較構文の用例である。

(83) 相人多矣, 无如季相。(会った人はたくさんいるが、すべて(身分の高い)季丞相に及ばない。)(『汉书・高帝』)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(83') 如'	[相人, 季相, 有' (相人, [高贵 1]) & 有' (季相, [高贵 2]) &					
アル	~ガ	~ト				
α	β	γ 1				
	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ
	有' {減' ([高贵 1], [高贵 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]					
アル		~ニ		~ガ		
				~トイウ状態ニ		
	γ 2			γ 3		

(84) 仰視見开孔如井大。(仰ぎ見ると、その穴は井戸のような大きさだ。)
 (『太平广记・旌异记』)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(84') 如'	[开孔, 井, 有' (开孔, [大 1]) & 有' (井, [大 2]) &					
アル	~ガ	~ト				
α	β	γ 1				
	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ
	有' {減' ([大 1], [大 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]					
アル		~ニ		~ガ		
				~トイウ状態ニ		
	γ 2			γ 3		

例(83)、(84)は比較構文である。その中の“相人(之貴)”と“季相(之貴)”、“开孔”と“井”は客観的な比較性を持つ。

実際、「比較」と「比喩」についての論述は古代漢語においてすでに存在する。秦の時代の思想家墨子はその著作『墨子』の中で「比較」と「比喩」について論じた。『墨子・経下』の中で「比較」について「損而不害, 说在余, 异类不口(比), 说在量。(能はずして害あらず, 説は宜に在り。異類は比せず, 説は量にあり。17)」と述べた。つまり、「種類が異なる事物は

17 『新釈漢文大系・第51巻・墨子(下)』(山田琢 明治書院 1987: 492-493)の日本語訳より。

比較することができない」の意を指摘した。すなわち、比較は同じ種類の事物の間で行われる。

また、『墨子・小取』の中で「比喩」について、「辟也者、举业（他）物而以明之也。（辟とは、也物を挙げて以て之を明らかにするなり。¹⁸）」と述べた。この意味は「比較は異なる種類の事物の間で行うことに重きを置く」ことである。唐代の皇甫湜はまた「凡喩必以非类（凡そ比喩は必ず異なる種類を用いる）」といった見解を有している。さらに、钱钟书は『管锥编』の中に「譬喩以不同类为类（比喩は違う種類を比較する）」と論述した。これからみると、「比喩」の最大の特徴は比喩の主体と客体は類別が異なるものであることが分かる。

八十年代から、比較構文と比喩構文の関係についての研究が多く展開されるようになった。この二者の区別について、たくさんの学者が「比較」と「比喩」は異なる言語運用であると認めた。この両者の関連性について、ある学者は「比較」と「比喩」は共通する部分を持つ、あるいは互いに重なる部分が存在すると考えた。従って、この両者は区別しにくいと判断したのである。

4.4.2 比較構文と比喩構文の共通点と相違点

ここで、筆者は「比較構文」と「比喩構文」の論理構造から両者の関連性を述べることにする。

「比較構文」と「比喩構文」の用例の論理式の分析からみると、両者は同じ三項関数“ $P'(\alpha, \beta, \gamma)$ ”である。どちらも“ α ガ β ト γ トイウ状態ニアル”の意を表す。これは「比較構文」と「比喩構文」の共通点と考えられる。

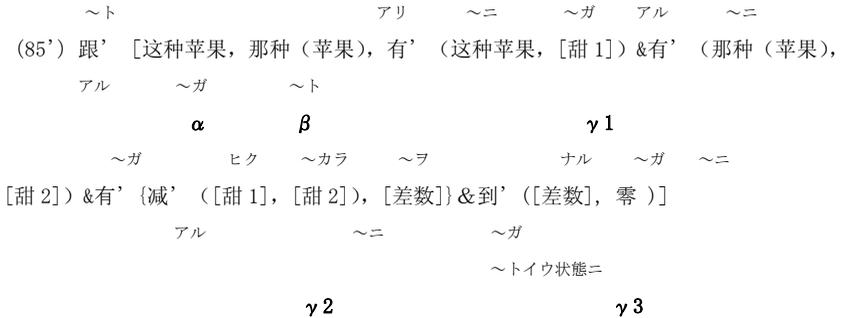
両者の相違点は「着点」を表す γ 3項の違いである。比較構文は同じ種類の二者の間にその共有する特徴を比較するから、主体と客体は実物の差（“零”あるいは“多少”）を持っている。比喩構文は違う種類の二者の間

¹⁸ 『新釈漢文大系・第51巻・墨子(下)』（山田琢 明治書院 1987: 574)の日本語訳より。

でその類似点を比較するから、主体と客体は非実物の差（“同級” あついは“超級”）を持っている。

次に、具体的な用例から比較構文と比喻構文の相違点を説明しよう。

(85) 这种苹果跟那种（苹果）一样甜。（このリンゴはあのリンゴと同じの甘さを持っている。）（朱德熙 1982）



例(85)は比較構文であり、その論理式は(85')である。(85')は「このリンゴはあのリンゴと同じ甘さを持っている」という命題内容は論理式では「跟'[这种苹果, 那种(苹果), 有'(这种苹果, [甜 1]) &有'(那种(苹果), [甜 2]) &有'{減'([甜 1], [甜 2]), [差数]} &到'([差数], 零)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有'(这种苹果, [甜 1])」は「“这种苹果”には[甜 1]がある」の意を、「有'(那种(苹果), [甜 2])」は「“那种(苹果)”には[甜 2]がある」の意を、「有'{減'([甜 1], [甜 2]), [差数]} &到'([差数], 零)」は「[甜 1]から[甜 2]を引いて差がゼロになる」の意を表す。ここの“到'”は「成る」の意を表す。用例(85)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、γ 1は「这种苹果」と「那种(苹果)」が「経験者格」を、「甜 1」と「甜 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がないこと、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。例(85)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 21 となる。

図 21

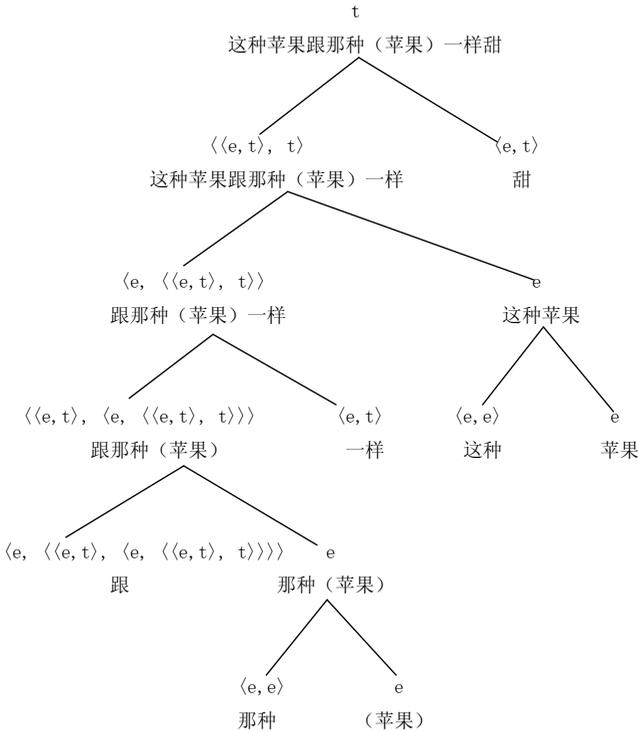


図 21 からみると、“跟”のタイプ式は“ $\langle e, \langle\langle e, t \rangle, \langle e, \langle\langle e, t \rangle, t \rangle\rangle\rangle$ ”の四項述語であり、“苹果”は個体定項“e”であり、“这种”と“那种”は“ $\langle e, e \rangle$ ”の複合定項であり、“一样”と“甜”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(85)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 23

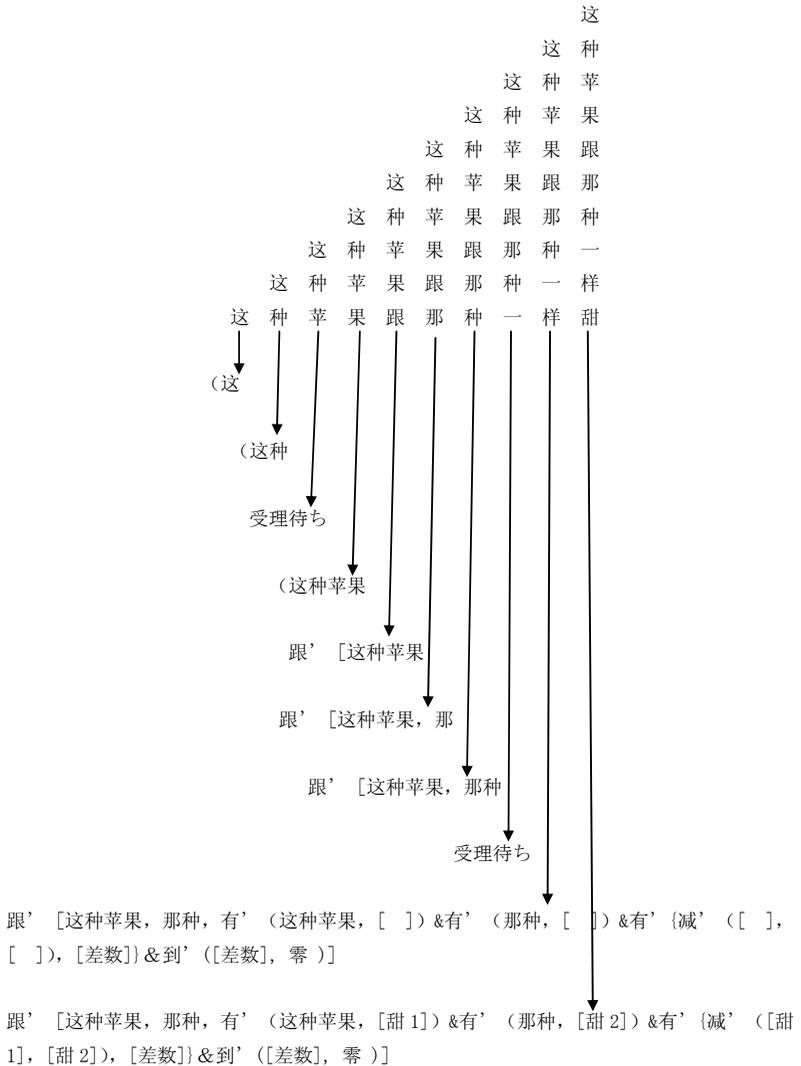
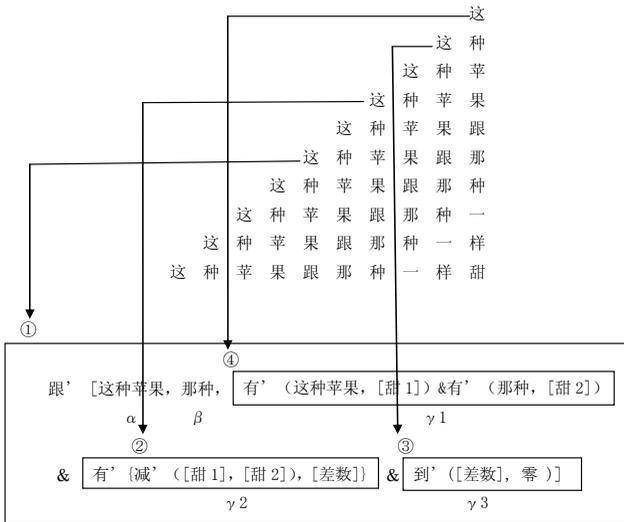


図 23 について説明しよう。まず“这”を入力し、論理式は“(这”になる。第二に“这种”を入力し、論理式は“(这种”になる。第三に“这种苹”

を入力し、ここで[受理待ち]になる。第四に“这种苹果”を入力し、論理式は“(这种苹果”になる。第五に“这种苹果跟”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果”になる。第六に“这种苹果跟那”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果, 那”になる。第七に“这种苹果跟那种”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果, 那种”になる。第八に“这种苹果跟那种一”を入力し、ここで[受理待ち]になる。第九に“这种苹果跟那种(苹果)一样”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果, 那种, 有’(这种苹果, []) &有’(那种, []) &有’{減’ ([], []), [差数]}&到’([差数], 零)]”になる。最後に“这种苹果跟那种一样甜”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“跟’ [这种苹果, 那种, 有’(这种苹果, [甜 1]) &有’(那种, [甜 2]) &有’{減’ ([甜 1], [甜 2]), [差数]}&到’([差数], 零)]”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 24 になる。

図 24



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で跟’ [α , β , γ_1 & γ_2 & γ_3]の三項函数が、第二に②で γ_2 の「量化」が、第三に③で γ_3 の「着

図 25

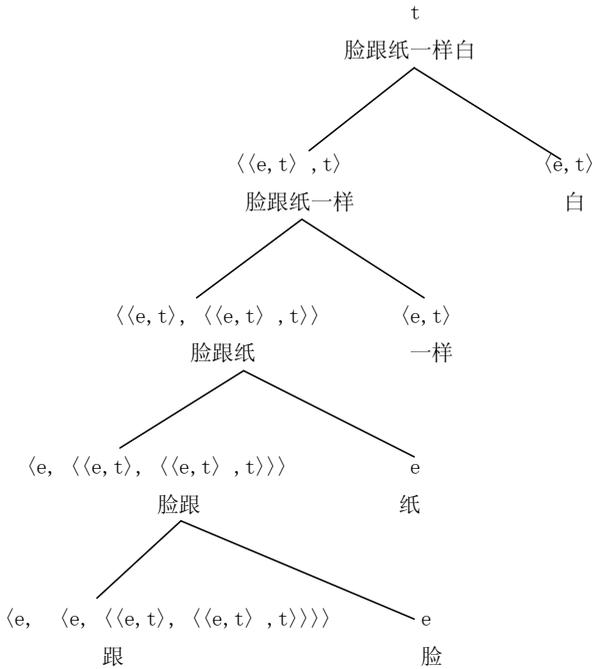


図 25 からみると、“跟”のタイプ式は“ $\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle$ ”の四項述語であり、“脸”と“纸”は个体定項“e”であり、“白”と“一样”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(86)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 26

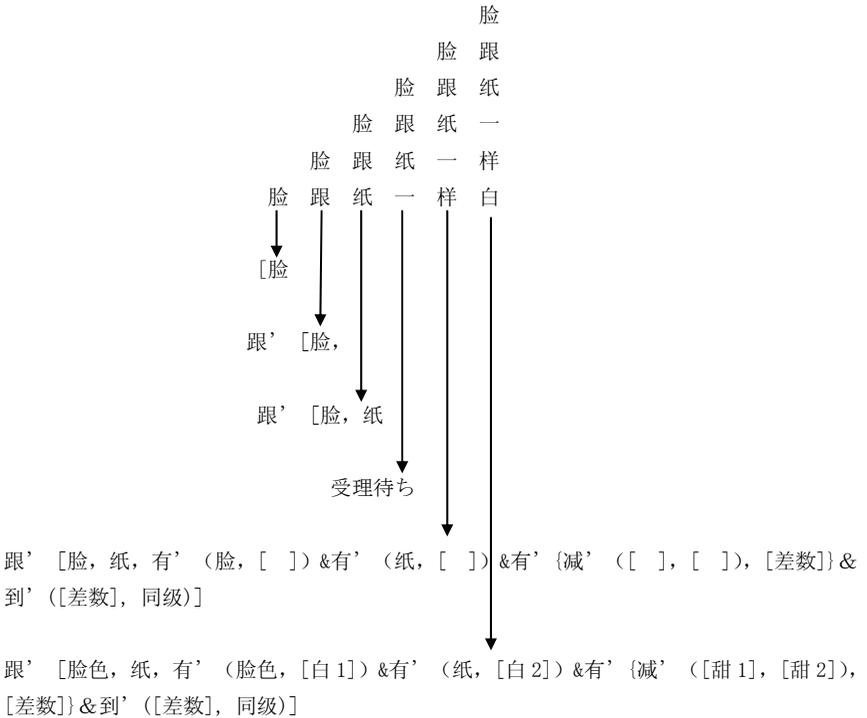
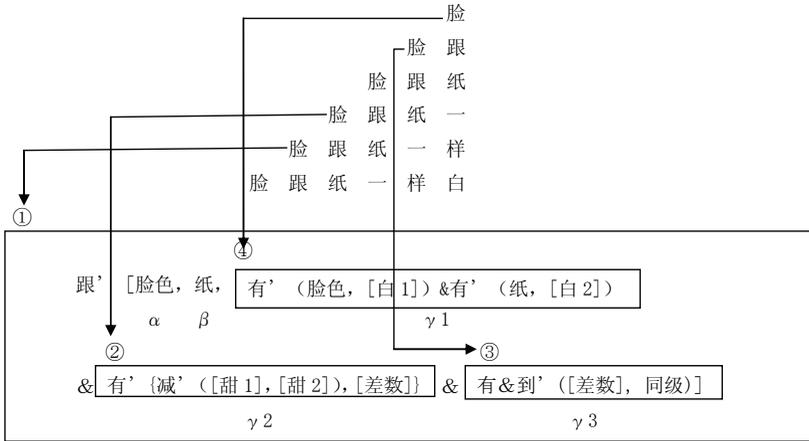


図 26 について説明しよう。まず“脸”を入力し、論理式は“[脸]”になる。第二に“脸跟”を入力し、論理式は“跟' [脸, ”になる。第三に“脸跟纸”を入力し、論理式は“跟' [脸, 纸]”になる。第四に“脸跟纸一”を入力し、ここで[受理待ち]になる。第五に“脸跟纸一样”を入力し、論理式は“跟' [脸, 纸, 有' (脸, []) &有' (纸, []) &有' {减' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 同级)]”になる。最後に“脸跟纸一样白”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“跟' [脸色, 纸, 有' (脸色, [白1]) &有' (纸, [白2]) &有' {减' ([甜1], [甜2]), [差数]} &到' ([差数], 同级)]”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 27 になる。

図 27



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で跟' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項函数が、第二に②で $\gamma 2$ の「量化」が、第三に③で $\gamma 3$ の「着点」が、第四に④で $\gamma 1$ の「格役割」が決定される。

ここで、筆者は张厚军(2010)が提出した比較と比喩との一つ目の判断基準(本稿の 40 頁参照)について、異論がある。以上の比較構文と比喩構文の用例の分析からみると、結果項が具体性を持たない、あるいは具体的でない文は比喩構文である。結果項がはっきりしている、あるいは具体性を与える文が比較構文であると考えられる。

5.まとめ

比較構文についての先行研究をまとめると、次の図 20 になる。

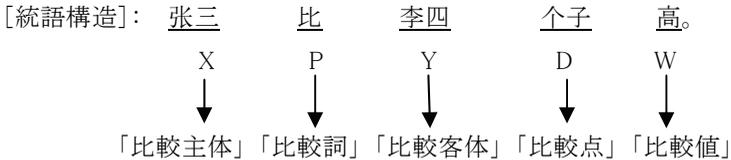
図 20

代表学者	比較の範疇あるいは類型	比較の標識
馬建忠 (1898)	平等比較構文 (平比文)	“如”、“若”、“犹”、“由”等
	差異比較構文 (差比文)	“於”、“于”、“乎”、“焉”等
	最上級比較構文 (極比文)	“最”、“至”、“极”、“甚”、“尤”、“益”等
吕叔湘 (1942)	類似(类同)	“也”
	比喻(比拟)	“象”
		“一样”、“似的”
		“如”、“若”、“是”、“为”等
		“並列構造” “隱語”
	近似(近似)	“象”、“似的”
	優劣(高下)	“一般”、“一样”、“有…那么…” “如”等
		“否定差異式”
	低比較(不及)	“不如”、“比不得”、“赶不上”、“没有”
	高比較(胜过)	“更”、“比…还/更…”
	最上級(尤最)	“最”、“尤”、“尤其”、“较(比较)”
	損得(得失)	“宁”
非及(不如)	“孰与”、“与其…孰若/岂若/不若”、“不如”	
比例(倚变)	“愈…愈…”、“越…越…”	
高名凯 (1957)	差異級 (差級) (comparative)	“更”、“益”、“愈”、“尤” “比…于…”
		“较(比、比较)…为…”
	最上級 (極級) (superlative)	“最”或“最为”、“至”、“极”、“绝”、“殊” “…于…”
		“较(比、比较)…为…”
趙元任 (1968)	平等比較 (相等)	“X 跟 Y 一样 A” “X 有 Y(那么)A”
	高比較 (高于)	“比…更”、“…比…的多”

	低比較（低于）		“X没(有)Y(那么)A”
			“不如”
			“不及”
	最上級（最高）	“顶”、“最”	
	反最上級（反最高）		“最不A”
刘月华・潘 文娱・故韡 (1983)	事物、性状の異同の比較		“跟…一样…”、“有…那么…” 等
	性質、程度の差別と優劣の比較		“比”、“没有…那么…”、“…不 如…”等
太田辰夫 (1987)	平等比較構文 (平比文)	相對的	“A像B一样”
	差異比較構文 (差比文)	絶對的	“A更…”
		相對的	“A比B…”
	最上級比較構 文 (极比文)	絶對的	“A最…”
相對的		(限定式)“A在…中最…” (非限定式)“A比什么都…”	
黎锦熙 (1992)	平等比較構文（平比文）		“像(好像、像…似的)” “似(似乎、好似)” “好比(比如、譬如)” “犹如(如同、如…一样)” “和…一般”
			“无异于” “不下于(不减于、不让于)” “等于”、“相当于”
	差異比較構文 (差比文)	高比較 (过于)	“赛过(赛似、胜过、过于)” “强于(强如)”
		低比較 (不及)	“不如”、“不及”、“没有” “差似(次于)”
	選擇複合文（审决句）		“与其…宁可(还是)” “与其…不如(何如)”
赵金铭 (2001)	類似（近似）		“…像…”、“…好像…”、“… 像…那么…”、“…像…似的”、 “…似的”
	相当（等同）		“…跟…一样…”、“…跟…那 么…”、“…跟…一般…”、“… 跟…相同”
	高比較（胜于）		“…比…”、“…比…还/更… ”、“…比…一点儿/一些…”

	低比較(不及)		“…不如…”
刘焱 (2004)	平等比較	相当	“X 跟/和/同/像 Y 一样(R)”
			“X 等于 Y”
		類似	“XR, Y 也 R”
			“X 不比 YR”
	近似	“X 有 Y 那么/这么 R”	
		“X 跟 Y 差不多”	
	差異比較	低比較	“X 没有 YR”
			“X 不如 Y(R)”
			“X 比较 R” “X 不像 Y 这样/那样 R”
		高比較	“X 比 Y1R”(比 1 構文) “XR, Y 更 R” “越来越…” “相比之下/和…相比, X 很…”
最上級			“X 最/顶 R” “连 X 都/也 R” “X 比 Y2 还 R”(比 2 構文)
车竞 (2005)	平等比較構文(平比文)		“像”、“等于”、“抵上”、“抵得上”、“赶得上”、“有”、“像…一样”、“跟/和/同/与…一样/相同/相等/差不多”
	差異比較構文 (差比文)	XはYと異なる	“跟/和/同/与…不一样/不相同/不相等”
		$X \geq$ あるいは \leq Y	“比”、“形容词+于”
		XはYの程度に 及ばない	“赶不上”、“不如”、“比不上”、“不及”、“没有”
限定比較構文(限比文)		“…不比…”、“…有…”	
许国萍 (2007)	平等比較	相当	“X 跟/像 Y 那么/一样 R”
		類似	“X 有 Y(那么)R”
	差異比較	最上級	“X 最 R”
		優性比較	“X 比 YR”
		劣性比較	“X 不像 Y 那么 R” “X 不比 YR” “X 没有 Y(那么)R” “X 不如 Y(那么)R”

ここで、例(7)「张三比李四个子高」の文を例に、比較構文の統語構造と論理構造の関連を説明する。



[論理構造]: 比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子 1]) &有' (李四, [个子 2]) &有' {減' ([个子 1], [个子 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]

統語構造の各成分のアルファベット表示を論理構造に入れ替えると、次のようになる。

P' [X, Y, 有' (X, [D1]) &有' (Y, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &到' ([(W) 差数], 多少)]

ここから、比較構文の論理的意味は「“比較主体”が“比較客體”と“比較点”についての“比較値”の「差数」が「いくらか(多少)」になるという状態にある」という意味である(論理表記においては、“比較値”はよく省略される。)となる。

次に、比較構文を文つまり命題表現から直接論理表記をする翻訳過程について説明する。

[翻訳の対象]: 张三比李四个子高。

[翻訳の順序]: 比、张三、李四、个子、高。

まず、最初に“比”の関数式を明らかにしておこう。次のようになる。この関数式を(a)とする。

(a) $\lambda P [P' [X, Y, 有' (X, [D1]) \&有' (Y, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数]\} \&到' ([(W) 差数], 多少)]]$

これから翻訳してみよう。第一のプロセスとして、語彙の“比”が式(a)を呼び出す。これを次のように表記する。(b)の式は“比”が(a)の式を呼び出していることを示している。

(b) $\lambda P [P' [X, Y, \text{有}' (X, [D1]) \& \text{有}' (Y, [D2]) \& \text{有}' \{\text{減}' ([D1], [D2]), [(W)\text{差数}] \& \text{到}' ([(W) \text{差数}), \text{多少}]]] (\text{比}')$

第二プロセスとして、式(b)にラムダ演算を施すと、P' に“比”が代入され、 λP が消去されて次のような式が得られる。これを式(c)とする。

(c) $\text{比}' [X, Y, \text{有}' (X, [D1]) \& \text{有}' (Y, [D2]) \& \text{有}' \{\text{減}' ([D1], [D2]), [(W)\text{差数}] \& \text{到}' ([(W) \text{差数}), \text{多少}]]$

今度はX、Yという変項を計算しなければならないので、式(c)をもとに、新しいラムダ関数を作り出す。それが次の(d)になる。

(d) $\lambda X \lambda Y [\text{比}' [X, Y, \text{有}' (X, [D1]) \& \text{有}' (Y, [D2]) \& \text{有}' \{\text{減}' ([D1], [D2]), [(W)\text{差数}] \& \text{到}' ([(W) \text{差数}), \text{多少}]]]$

ここで、“张三”が式(d)を呼び出す。その結果、次の式(e)が得られる。

(e) $\lambda X \lambda Y [\text{比}' [X, Y, \text{有}' (X, [D1]) \& \text{有}' (Y, [D2]) \& \text{有}' \{\text{減}' ([D1], [D2]), [(W)\text{差数}] \& \text{到}' ([(W) \text{差数}), \text{多少}]]] (\text{张三})$

(e)の式に λ 演算を施すと、実引数の“张三”がXに代入され、 λX が消去されて次の(f)になる。

(f) $\lambda Y [\text{比}' [\text{张三}, Y, \text{有}' (\text{张三}, [D1]) \& \text{有}' (Y, [D2]) \& \text{有}' \{\text{減}' ([D1], [D2]), [(W)\text{差数}] \& \text{到}' ([(W) \text{差数}), \text{多少}]]]$

次に、“李四”が式(f)を呼び出す。すると、関数適用の結果、次の(g)のような演算式が得られる。

(g) $\lambda Y [\text{比}' [\text{张三}, Y, \text{有}' (\text{张三}, [D1]) \& \text{有}' (Y, [D2]) \& \text{有}' \{\text{減}' ([D1], [D2]), [(W)\text{差数}] \& \text{到}' ([(W) \text{差数}), \text{多少}]]] (\text{李四})$

(g)の式にラムダ演算を施すと、次の(h)となる。

(h) 比' [张三, 李四, 有' (张三, [D1]) &有' (李四, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &到' ([(W) 差数], 多少)]

さらに、D、Wという変項を計算しなければならないので、式(h)をもとに、新しいラムダ関数を作り出す。それが次の(i)になる。

(i) $\lambda D \lambda W$ [比' [张三, 李四, 有' (张三, [D1]) &有' (李四, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &到' ([(W) 差数], 多少)]]

ここで、“个子”が式(i)を呼び出す。その結果次の式(j)が得られる。

(j) $\lambda D \lambda W$ [比' [张三, 李四, 有' (张三, [D1]) &有' (李四, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &到' ([(W) 差数], 多少)]](个子)

(j)の式に λ 演算を施すと、実引数の“个子”がDに代入され、 λD が消去されて次の(k)になる。

(k) λW [比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子1]) &有' (李四, [个子2]) &有' {減' ([个子1], [个子2]), [(W)差数]} &到' ([(W) 差数], 多少)]]

最後に、“高”が式(k)を呼び出す。すると、関数適用の結果、次の(1)のような演算式が得られる。

(1) λW [比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子1]) &有' (李四, [个子2]) &有' {減' ([个子1], [个子2]), [(W)差数]} &到' ([(W) 差数], 多少)]](高)

(1)の式にラムダ演算を施すと、次の(m)となって、“张三比李四个子高”の論理式が得られる。

(m) 比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子1]) &有' (李四, [个子2]) &有' {減'

([个子 1], [个子 2]), [(高)差数] & 到'([(高) 差数], 多少)]¹⁹

¹⁹ この論理式についての解釈は本章の 4.1 参照。

参考文献：

- (1) 车 竞 2005 「现代汉语比较句论略」『湖北师范学院学报』2005(3) : 60-63
- (2) 储泽祥等 1999 「通比性的“很”字结构」『世界汉语教学』(1) : 36-44
- (3) 辞海编辑委员会编 1989 『现代汉语辞海』 上海辞典出版社
- (4) 丁声树 1961 『现代汉语语法讲话』 北京商务印书馆
- (5) 方立 2000 『逻辑语义学』 北京语言大学出版社
- (6) 房玉清 1992 『实用汉语语法』 北京语言学院出版社
- (7) 冯春田 2000 『近代汉语语法研究』 山东教育出版社
- (8) 高名凯 1985 『汉语语法论』 商务印书馆
- (9) 贺又宁 2001 「现代汉语比较句的结构特色于语用制约试析」 『贵州大学学报(社会科学版)』2001(5)No. 3 : 70-74
- (10)
- (11) 黄晓惠 1992 「现代汉语差比格式的来源及演变」『中国语文』1992(3) : 213-224
- (12) 蒋绍愚·曹广顺 2005 『近代汉语语法史研究综述』 商务印书馆
- (13) 黎锦熙 1992 『新著国语语法』 商务印书馆
- (14) 刘大为 2004 「“凡喻必以非类”、“同类作比即比较”的质疑与比喻理论的建构」『修辞学习』2004(2) : 13-17
- (15) 刘丹青·徐烈炯 1998 「焦点与背景、话题及汉语“连”字句」『中国语文』1998(4) : 243-251
- (16) L.Stassen. 1985 Comparison and Universal Grammar. Basil Blackwell
- (17) 刘 焱 2004 『现代汉语比较范畴的语义认知基础』 上海学林出版社
— — 2004 「“比”字句对比项选择的语义认知基础」『上海财经大学学报』2004(6) No. 5 : 76-81
- (18) 刘月华·潘文娛·故韡 2001 『实用现代汉语语法(增订本)』 商务印书馆
- (19) 陆俭明 1980 「“还”和“更”」 北京大学汉语语言学研究中心『语

- 言学论丛』编委会编『语言学论丛（第六辑）』 商务印书馆
1980:191-209
- — 1982 「析“像……似的”」『语文月刊』1982(1):1-12
- — 1981 「“更加”和“越发”」『语文研究』1981(1):22-29
- (20) 陆俭明·马真 1985 『现代汉语虚词散论』 北京大学出版社
- (21) 吕叔湘 1990[1942 初稿] 『吕叔湘文集（第一卷）——中国文法要略』
商务印书馆
- — 1999[1980 初稿] 『现代汉语八百词（增订本）』 商务印书
馆
- (22) 马建忠 2007[1898 初稿]『马氏文通』 商务印书馆
- (23) 马 真 1986 「“比”字句内比较项 Y 的替换规律试探」『中国语文』
1986(1):97-105
- — 1988 「程度副词在表示程度比较的句式中的分布情况考察」
『世界汉语教学』1988,(2):81-88.
- (24) 任海波 1987 「现代汉语“比”字句结论项的类型」『语言教育与研究』
1987(4):91-103
- (25) 邵敬敏 1990 「“比”字句替换规律刍议」『中国语文』1990(6):
410-415
- — 1992 「语义对“比”字句中助动词位置的制约」『汉语学习』
1992(3):13-16
- (26) 邵敬敏·刘焱 2002 「比字句强制性语义要求的句法表现」『汉语学
习』2002(10)No.5
- (27) 沈家煊 2001 「跟副词“还”有关的两个句式」『中国语文』2001(6):
483-493
- (28) 史佩信 1993 「比字句溯源」『中国语文』1993(6):456-461
- (29) 石毓智·李讷 2001 『汉语语法化的历程—形态句法发展的动因和机制』
北京大学出版社
- (30) 松村文芳 2011 「現代中国語の主要な統語構造の論理形式」 大東
文化大学—国際シンポジウム

- — 2005 「「把構文」と「被構文」に用いられる「给」の意味と論理」 『語学教育研究論叢第22号』
- (31) 太田辰夫著(蒋绍愚·徐昌华译) 1987[1958初稿]『中国語歴史文法』北京大學出版社
- (32) 『新積漢文大系·第50卷·墨子(上)』 山田琢訳 1987 明治書院
- (33) 『新積漢文大系·第51卷·墨子(下)』 山田琢訳 1987 明治書院
- (34) 许国萍 1996 「“比”字句研究綜述」『漢語學習』1996(6):28-31
— — 2007 「現代漢語差比範疇研究」 上海學林出版社,2007 又見許國萍「現代漢語差比範疇研究」 復旦大學博士學位論文 2005 期
- (35) 殷志平 1987 「“比”字句淺論」『漢語學習』1987(4):3-5
— — 1995 「“X比Y还W”的兩種功能」『中國語文』1995(2):241-254
- (36) 張厚軍 2010 「試論比較和比喻的區別」『現代語文(語言研究)』2010(3):30-32
- (37) 趙金銘 2001 「論漢語的“比較”範疇」『中國語言學報(第十期)』商務印書館 2001:1-16
— — 2002 「差比句語義指向類型比較研究」『中國語文』2002(5):452-458
- (38) 趙元任 1968 『漢語口語語法』呂叔湘譯 商務印書館
— — 1979 『A Grammar of Spoken Chinese』 The University of California Press
- (39) 『中國の古典5·莊子上』 池田知久訳 昭和五十八年 學習研究社
- (40) 中國の古典6·莊子下』 池田知久訳 昭和五十八年 學習研究社
- (41) 中國社會科學院語言研究所詞典編輯室編 1987 『現代漢語大辭典』商務印書館
- (42) 朱德熙 1982 『語法講義』 商務印書館
— — 1982 「說“跟···一樣”」『漢語學習』1982(1)
— — 2003[1980初稿]『現代漢語語法研究』 商務印書館
- (43) 鄒崇理 2000 『自然言語的邏輯分析』 北京大學出版社